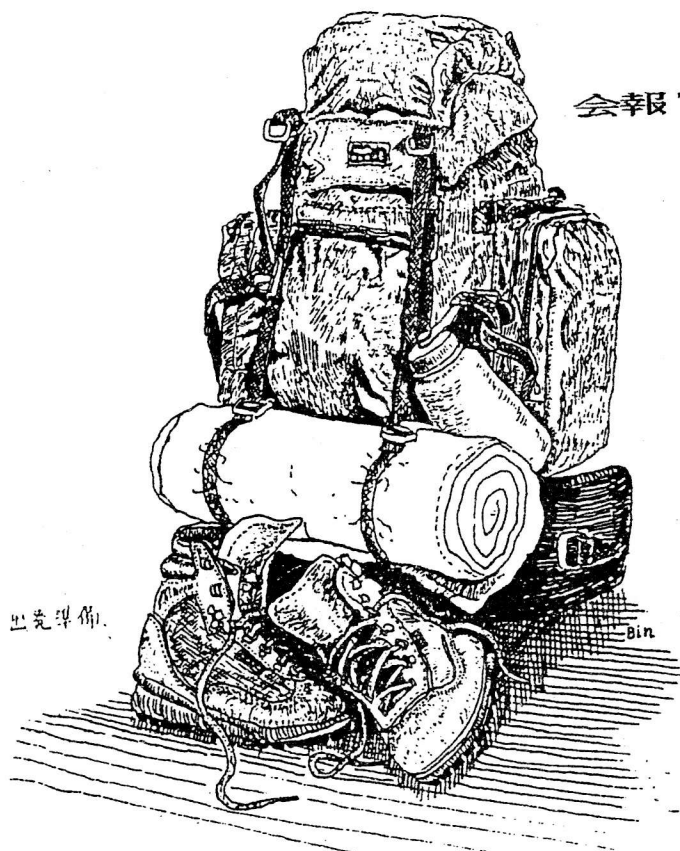


夏まざと

会報7号 (97夏号)



金沢大学ワンダーフォーゲル部・OB会

OB会会長の挨拶

13期 大島 良治

会員の皆様、この暑い夏、お元気でお過ごしでしょうか。

今年は冷夏という予想があり、クーラーの売れ具合を心配しておりましたが（実は、私の仕事は、冷暖房設備工事です）、結構暑く、杞憂となりました。ハイテク時代になっても、ピタリと当てるのは難しいものですね。

仕事柄、毎日が「冷房が効かない」という苦情処理の連続で、本当に大変です。「夏は暑いのが当たり前。暑いのがイヤなら、寒い国に行けば!」と、客の前では言えない鬱積を、誰もいない車に戻ってから吐きすてていることもしばしば…。大体エネルギー保存の法則によれば、自分の廻りを涼しくする事は、他の部分（屋外）を暑くする事なので、他人にとっては迷惑な装置なのです。全ての人が勝手過ぎるので、都会の真中は夜になっても、昼のように暑いのです。全部クーラーが原因です。

OB会役員会の活動経過 とOB関係情報

(#は日の確定していないもの)

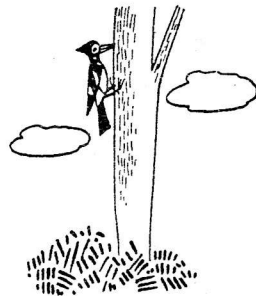
このクーラーの大部分は、フロン22という冷媒を使って室内を冷やしているのですが、近年の地球環境破壊（オゾン層の破壊、温暖化）の要因の一つではないかと言われ、将来使用禁止となります。皆様は、クーラーというものの恩恵を受ける最後の人間となるかもしれません。とは脅かしたものの、冷やす方法は他にもありますのでご安心下さい。人間の知恵は素晴らしいものなのです。いわば人間の勝手が、次々と技術開発につながるのですが、だからといって「勝手」がいつまでもエスカレートしていい訳ではありません。夏の室温は27度以上が望ましいのです。エネルギーの面でも環境に優しく、人間の体にとっても優しいのです。

先日仕事で、白山麓吉野谷村に行く機会がありました。金沢よりは随分涼しい気候でした。沢山の木々に囲まれた涼しい環境は、クーラーを何台設置しても実現できはしません。しかしその時は、吉野谷村のレストランにクーラーを私共が設置してきたのでした。完成後のオープンの日、「何と涼しいんや」と入って来る客を見て、「お前はどの吉野谷へ、クーラーで涼むために来たのか！」と毒づきたくなり、心中で虚ろに反響したものでした。

今回のご挨拶は、天気予報に端を発し、物理学、哲学、そして人間の心理学へと拡大し、ワングル教ワインシュタイン派にそれあらず感化された模様でもあります。

暑い夏ですが、体を鍛える人、労る人、それぞれに思い出多い季節となりますよう祈っております。

- 1月28日 会報6号製本済（久富）
- 1月29日 会報6号、BH33-37号同時発送
（舟田 西馬 金吉 牧原 阪本）
- 4月# 5万分1地形図作成・所蔵目録上梓
（国土地理院 11期長岡正利氏他）
- 4月20日 OB会役員会通信N026発送
- 4月30日 小屋酒場打ち合わせ
（辰野 椿川 舟田）
- 5月12日 小屋酒場参加者へ案内送付（舟田）
- 6月1日 資材購入、ダム搬入（辰野 椿川）
- 6日 資材ボートで搬入
（現役 山崎 高岩 中野 長谷川）
- 7,8日 初夏の小屋酒場 （10名参加）
モルタル補強、流し、竈設置
旧道補修
- 11日 スポーツ振興課へ作業報告
- 19日 OB会役員会通信N027発送（舟田）
- 23、24日 大阪営林局、金沢営林署、犀川国有
林を視察（梅 同行）
- 30日 田村さん小屋より下山
- 7月4日 スポーツ振興課より入金
- 8月2,3日 15期同期会（伊吹山）
- # 宛名ラベル作成（名倉）
- # 会計報告作成、会費納入手配（鳥越）
- # 一言通信葉書作成（坂尻）
- # 会報印刷（中川）
- # 製本手配（北川）



ベルクハイムへのカンパ ありがとうございました

先日、現役が久し振りに部誌「ベルクハイム」を發行し、皆様方にも
1部ずつ読んでいただいたおかげで、費用を1口1,000円を
深く読んでもらったので、お礼の意を込めて、この場を
に上回る多額のカンパをいただいた皆様、誠に厚く御礼申上げます。

ベルクハイムにカンパをいただいた方々（敬称略）

池本 高島 金岩 大崎 柳磯 鍋川 畔島 伊山 小藤 金谷 間井 恵所 坂比 帯井 竹中 石倉 名山 金田 藤久 吉村 多	和彦 誠孜 孜進 岩雄 徹武 宏次 純治 啓一 新泰 尚登 圭子 隆司 裕均 章之三 直子 聡美 夫	江竜 田村 川島 小出 四藤 伊部 服森 杉島 大田 清家 舟宅 三村 川藤 佐梅 安達 小久 村井 高橋 畠山 谷腰 水村 村	史夫 昭義 義夫 利道 博千 和章 義治 幸子 毅弘 高代 喜典 敦雅 匠治 伸潤 敏行 英四 美智	北野 登内 富田 合津 村田 清水 中山 森川 辰野 上馬 松繩 塚本 櫓座 格川 佐倉 黒崎 興井 神谷 難波 辻田 野腰 水村 柴	子夫 郁征 尚泰 一夫 功義 隆生 康宏 克宣 久子 利弘 正樹 敏隆 明延 利行 白峰 和裕 千佳 祐子	佐々 森島 石橋 中川 篠島 白井 島林 宮島 吉田 奥名 松林 山小 岡部 岩田 小越 鳥戸 荒井 酒井 土井 石倉 鮎川 牧	穂美 稔三 毅三 皓益 益夫 勇司 仁孝 穂司 正積 正啓 知一 正彦 敬伸 次男 正博 伸雅 正雄 美彦 教泰 昭剛 子康
---	--	---	--	---	--	---	--

秋の山小屋酒場のご案内

9月20日（土）-21日（日）

*参加希望の方は、即返信はがきでご投函いただくか、直接電話にて事務局（☎076-222-9288）へお知らせ下さい。おって詳細をお知らせします。

*現役は19日から21日で小屋作業に入ります。CLは高石君です。

*飛石連休の関係でいろいろな参加の仕方もあるかと思いますが、ご一報いただければ、相互連絡などの便宜を図ります。



0 B 会 会 計 報 告

(平成8年12月1日～平成9年6月30日)

《 収 入 の 部 》

0 B 会費納入	44,000
ベルクハイムカンパ	395,000
預金利息	746
計	439,746

《 支 出 の 部 》

0 B 会報 (やまざと) No.6 制作費	62,128
〃 郵送料	144,460
〃 人足代	8,000
ベルクハイム印刷代	357,000
秋の小屋作業食費・写真代等	14,087
春の小屋酒場道具代	25,447
〃 食費・備品代	20,896
〃 資材運搬賃他	27,079
3期田村氏小屋番補助	8,438
小屋作業案内等事務局連絡費	34,120
文具費その他	28,002
計	729,657

《 差 引 剩 余 金 》

前回 (8.11.30現在) 繰越金	1,547,455
収 入 の 部	439,746
支 出 の 部	729,657
差 引 合 計	1,257,544

イワヒバリ



参加希望者からの返信

*田村 昭夫 3期

「やまざと6号」ありがとうございました。
「閉経の妻云々」は「現役の妻云々」の誤りで
した。訂正してお詫び申し上げます。

(編者注；拝啓 昭子さま。ひたすら感服申し
上げます。貴女の右に出る妻は想像できませ
ん。 敬具)

*合津 尚 6期

期日によっては可能性があるので、一応送って
みて下さい。

*村田 泰恵 7期

忙しくて返信が遅れてすみません。山小屋へは
行きたいのですが、肉体労働を考えると、行き
たくても行けません。

*沢田 孝雄 7期

昨年8月、30年勤めた銀行を退職し、関連会社
に再就職しました。保険代理業、商業ビル賃貸、
携帯電話等の販売を主とする会社です。田村先
輩のように新しい世界へというわけにゆかず、
前職の延長のようではささか情けないのですが、
あせらず新しい目標を見つけて、楽しい、少し
でも悔いのない人生になればと考えています。
「やまざと」ありがとうございました。毎度編
集子の皆さんの努力熱意には頭の下がる思いで
す。出来る限りバックアップをしてゆきたいと
思っています。

*平村 耕作 9期

「やまざと」6号ありがとう。いつも労作には
頭が下がります。とても楽しく読んでいます。
ところで、白井親分はじめ9期のみんなはどう
しているかな？今度の機会に「山小屋酒場」に
是非参加したいと思っています。久しぶりに会
いたいですね。

*島林 仁司 10期

出来れば参加したいと思っています。

*辰野 隆義 13期

今年の春は、土台補強、及び、カマド、水場の
整備を考えています。でもやっぱり、便所の整
備が急務ではないでしょうか。

春の作業時には、秋のことまで考えて荷揚げを
したいと思います。ダムのボートを利用できる
うちにボッカしなければ。そのため、ボッカで
時間がとられることになりそうです。力自慢の
方は是非とも参加を！！

*大島 良治 13期

いつも大変お世話になります。

高村君と石田君の奥様の手記は本当に感激しま
した。機会があればお会いしてお話し出来れば
と思います。

*吉田 穂積 13期

*上馬 康生 15期

連絡大変遅くなってすみません。体調が回復し
ておれば、春の山小屋へ行きたいと思っています。
す。

(次の便)

前略。OB会役員通信ありがとうございます。
小屋作業はいつもの顔ぶれだけで働き手が
少なく大変だったと思います。

私も速く山歩きがしたいのですが、今夏は無
理です。医者から手術後6ヶ月は運動はダメと
言われています。といっても机の上の仕事は、
じっとイスに座っての作業となり、腰には全く
よくありません。毎日夕方には左足がしびれて
います。残業で遅くなったりすると翌朝起きて
もしびれが残っています。できるだけ早く帰り
休日は横になったりしてゆっくりするようには
心がけているのですが、なかなか思うようにい
きません。体験談は今は書けそうにありません。
完治してからにでもと考えています。(編者注



―貴重な体験を書いて！と迫った、冷徹な編集者がいたんです。）

通信にありました「白まだら」はヘビの作業と思われます。私も学生時代に一人で泊まっていた頃に見たことがあります。

*松林 知一 15期

「やまざと」ありがとうございます。今冬は下の娘にスキーを特訓。毎週のように鳥越高原に通いました。おかげで現役時代に比べ、少しはスキーの腕（足）も上がったようです。今度OB会のスキー合宿をやりませんか。



*間所 新一 15期

現在神奈川在住の為、なかなかBHへ行くこともできませんが、やまざとは毎回楽しく読ませてもらっています。いつか行きたいとの希望を忘れないよう、案内を見させて頂きたいと思っています。

*松縄 宏 15期

行ける行けないは判りませんが、小屋作業に汗した昔を思い出します。

毎度毎度熱心に執筆され御苦労様です。負担にならない様やって下さい。

（次の便）

拝復 小屋作業のご案内拝受致しました。残念ながら土日に休暇が連続して付けられず行けません。また次回（毎度同じ繰り返しの気がして自分ながら残念）を期待する処です。

それにしても貴女のバイタリティーには敬服するのですが、どこからその元気が湧いてくるのか、私にも少し伝授願う処です。当日の好天であることを祈っております。安全無事な小屋作業を終えんこと、またみなみな様益々のご健勝をお祈り申し上げます。 敬具

*金井 澄 15期

やまざとありがとう！偉大な事務局長を送り出している15期の一人として誇りに思っています。

山小屋ぜひ行きたいのですが、またダメかもしれません。でも夢を見るためにも案内をお願いします。

（次の便）

前略 初夏の山小屋酒場の案内ありがとうございます。残念ながら所用のため又も行けそうにありません。家の建て替えや雑事に追われあくせくした日々を過ごしています。ザックに倉谷の思い出を一杯詰めて、伊吹山に持ってきて下さい。15期会での報告を楽しみにしています。なお同封のビール券を作業隊の皆様のウガイ用にでも使っていただければ幸いに存じます。皆様によりしくお伝え下さい。安全の完遂・大宴会を明石の地よりお祈りしています。 早々

*坂尻 忠秀 15期

追悼集本文ようやく刷り上がりました。送ります。とはいってもこの後写真ページ、表紙、製本、発送とまだまだ続くと思いますが、よろしくをお願いします。

なお5月8日から6月6日までの間、ヨーロッパとアメリカを回る旅に出ます。山小屋酒場は失礼します。

*舟田 節子 15期

玄関にうず高く発送物を積み上げた後、私は可愛い現役4人に、手作りの加賀料理をご馳走してあげました。カニ真蒸、タラの子付け、甘エビの刺身、合鴨の治部煮に、白子のおつゆ…。特に白子は極上品を奮発してあげました。

…ところが、京子ちゃんの様子がおかしい。私がお茶を入れに行っている間に何か言われたみたい。「男の味はどう？」とか「これを食べると男が欲しくなるぞ」とか（…これ想像）。ミセスの私、全然気が回らなかった。乙女心を傷つけたみたいで…気にしています。

白子を100%食材としか思わなかった私は、やっぱり…。

*椿川 利弘 18期

松任から山中町までの毎日の通勤途中に、白山を見ることができます。天候、場所、時間等でいろいろな姿を見せてくれますが、冬の晴れた日の朝、小松付近で見るのが一番だと思います。

*岡部 伸一 18期

*鳥越 伸博 23期



*吉田 直子 28期

数年前より溪流釣りにハマっています。卒業してから10年になろうとしているのに、学生時代と根本的に変わらぬ自分に苦笑しています。

「やまざと」は昔を懐かしむというより、OBの現在の姿を垣間見ているようで、楽しんで読ませてもらっています。

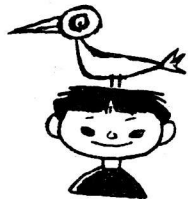
同期(28期)や近い期の方々、いかがお過ごしでしょうか。

*野田 和裕 30期

前々から一度参加したいと思いながら、バタバタ続きでちっとも参加できません。案内を送ってもらっても参加の保障はないですが、とりあえずよろしく願います。

*柴田 祐介 37期

やまざと6号ありがとうございます。懐かしい名前を行間に見つけ、ワンゲル以外の学生生活を思い出しておりました。誰であろう、宮本憲一氏、その人です。氏(では他人行儀すぎるので敬愛の念を込めて、「ケンちゃん」)の著書にはゼミで苦労させられ、よくし審に遅れたものです。あんまりワンゲルに関係ない話ですいません。



非参加者からの通信

*佐古 文男 2期

*登内 郁夫 3期

今年はまだ山小屋酒場にはお伺いする時間はとれそうもありません。あと2-3年後は思っております。酒量も体力もだんだん落ち目となって来ております。

金沢でうまい酒を飲みたい!!と思っております、いつでも。皆様にお会いしたい!!

*池本 和彦 3期

春の山小屋酒場へ参加したいのは山々ですが、なかなか出来ません。少しばかりですがカンパしました。頑張ってください。

*森島 稔 4期

'96 冬号ありがとうございます。いつもながら、たくさんの原稿をていねいに編集されていて、読みごたえがあります。ご苦労様です。

今年から、女房と近くの山への散歩を始めようと思っています。

*川島 勇 5期

(残念ながら)一度春の山小屋酒場に泊ってみたいのですが、参加できません。皆様のご活躍、陰ながらお祈りいたします。

*大崎 進 6期

勤務先の電話番号がダイヤルインに変わりました。

*中川 皓三郎 6期

田村さんがおられる時に、一度ぶらりと山小屋に訪ねてみたいなあと思っています。いつもお世話になりありがとうございます。

*篠島 益夫 8期

平成8年12月より松下電工㈱からナショナル住宅㈱に転籍して、中国・四国営業部(岡山市)

勤務となりました。

アルプス山上の山小屋は無理ですが、住まいとアパート、賃貸マンションなら任せて下さい。

*白井 勇 9期

拝復 やまざとNO.6ありがとうございます。雑事に追われて御礼が遅れましたことをお詫び申し上げます。

田村大先輩を軸とするBergheimに関わる多くの方の文章を拝読し、ふと室生犀星の”ふるさと”は遠きにありて思うもの そして悲しくうたうもの…”の一部を思い出しました。「ふるさと=Bergheim」から自分が段々と遠くなっていくような、そんな寂しさを感じました。



*伊藤 博道 9期

「ベルクハイム」受領しました。ありがとう。カンパ分、僅かですが、二千元送金いたしました。皆さんのご活躍を祈ります。

*山中 重夫 9期

*杉森 和義 11期

部誌・会誌ありがとうございます。号数を増す毎に、待ち遠しくなっている今日この頃です。先日、越前海岸の方へ”重油除去”のボランティアに行ってきました。一部不純な動機もありましたが、作業終了後のスガスガしさは、日頃のストレス解消になったかと思っております。

*長岡 正利 11期

天山の北、カザフスタンにいます(仕事)。
首都アルマトィ(旧称アルマアタ)は標高800m位で、このすぐ南にクンゲイ・アラタラ山脈の5000m近い白雪の峰々が延々と連なっています。
3月下旬はどこを見ても雪景色だったものが、4月に入って1日降り続いた雨の後、急に暖かくなって、市内の鬱蒼たる楊や楓の並木が一斉に緑に変わりつつあります。
社会不安から一触即発の暴動の危機を潜在させているとはいえ、訪問者には実に良い所です。

*伊藤 純治 13期

*小島 敬 17期

NIFTY-SERVE CZD10674

FAX 052(892)1224

インターネット・メール

TAKASHI KOJIMA@gw.toyotsu.co.jp

*久富 象二 20期

6月7日は我が社の美女達からバーベキューの熱い(!!)お誘いを受けておりまして、私としてはそちらへ参加する気持ちを固めております。美女達からのお誘いであります故、あしからず。諸般ご賢察下さい。

近況報告

5月3-5日は藪のメンバー+4名、総勢9名で岐阜県側から(スーパー林道口-三方岩-国見山) 茂へ行ってきました。天候は今一つではありましたが、6度目の登頂となりました。貴姉と会ったら、オレンジとレモンティーを差し上げようと用意しておりましたし、メンバーでお掛けする言葉も考えておりました。

現在18日の「白山サバイバルマラソン」に向けて調整中ですが、転んで(ワンデリングの途中)雪の塊で打った胸が少し痛く、完調ではありません。

(アネさんはね、4-5日で冬瓜平からの往復だったから、どのみち会えなかったと思うの。それより、藪でコンタクトレンズはふっとぶ、プラスチックブーツの底は剥がれだす…で、超悲惨な山行だったわ。あれに比べればどの山もチョロク思えるのが、せめてもの慰めよね。)

*石地 隆司 23期

一度、倉谷でイワナ釣りなんぞやってみたいとは思っています。

*高橋 伸治 25期

毎回、連絡ありがとうございます。残念ながら遠方で今回も参加出来ません。ベルクハイム誌

へ三千円カンパします。なつかしく読まさせていただきます(私も昔ベルクハイムの編集をしました)。

*藤田 章三 26期

仕事柄3月は忙しく、たいへん遅くなっていました。誠に申し訳ございません。

参加できる時があったら是非行きたいと思っています。その時までよろしくお願いします。

*畠山 潤 26期

山スキーを中心とした山行を続けています。二人目が誕生し、今年も子供を背負っての登山になりそうです。転勤により住所変更しました。

*土井 泰彦 28期

ベルクハイムお送りいただきありがとうございます。私は28期ですが、ベルクハイムが発行されておらず残念です。一言、プロフィールに似顔絵が載るのが夢です。今後も発行に力を注いで下さい。

*高木 美保 29期

御無沙汰しております。今126日ぶりにペルーの人質が解放されたというニュースを聞きながら書いています。いつもお便りを頂くばかりで返信も出さず申し訳ありません。実は事情があって急に引っ越すことになりバタバタと多忙で…この際、私としては金沢へ引越したかったのですが、塾の都合がつかず結局市内での引越となりました。久しく金沢に行っていない…一年前のゴールデンウィークからだ。また顔をださせて下さい。(古い土蔵造りの大きな家です。北アのついでにお立ち寄り下さい。10人は泊まります。)

*不動 良輝 30期

(お忙しい中いつもお世話に相成りありがとうございます。お送りいただきました書籍小包いつもお手数かけ申し訳ありませんが、良輝は三

年前から左記の名古屋に行っており自宅にはおりませんので、今後はそちらの方へお願いいたします。父)

*鮎川 剛 32期

住所変更しました。勤務先は変更ありません。

*石川 明弘 36期

この度住所が変わりましたのでお知らせします。田村さんは今年も修行されているのでしょうか。



(事務局長たる舟田への年賀状なのでどこまでを私信・公信とすべきか?近況報告になりそうなものを若干紹介)

*前田 達男 顧問

事務局長さんご苦労様です。冬合宿、一日遅れで参加してきました。3年で卒業という雰囲気少しは変えないといけないうのですが。

*北 正昭 3期

折にふれいただいた「石川県の山」をながめてあれこれ思いをめぐらせております。本年も元気でがんばって下さい。

小生あいもかわらず正月酒を飲みつつ、賀状をしたためております。

*稲葉 正己 5期

OB会のお世話感謝しています。アテにならぬ会員ですが今後ともよろしく。

*中山 美津枝 7期

白山、口三方岳、奥三方岳、大倉岳、富士写ヶ岳(以上石川県)越知山、金毘羅山、越前大日山、平家岳(以上福井県)、武尊山(群馬県)妙高山(新潟県)以上が昨年踏破した山です。本年も北陸百山を目指してがんばります。

(以上ご主人)

昨年はご覧のような山行きでした。本年もぼちぼちこんなところかも。

*青柳 健二 11期

昨秋のベルクハイム行は参加できず残念でした。
またの機会を楽しみにしています。



*小山 清 11期

OB会のお世話本当にご苦勞様です。昨年も剣岳を眺めに大日岳に数回通いました。

*山内 政司 16期

OB会行事に参加しようと思いがちなかなか。勝山からは決して遠くはないと思っているのですが、やはり腰が重いのでしょうか。今年こそは参加します。よろしくお願いします。

*松下 和隆 早苗 20期

11月に出張でピッツバーグ（米国）へ行ってきました。きれいな町ですがとても寒い。-7度は冬山を思わせるきびしさでした。

*中川 晃成 23期

ほとんど印刷しか仕事ができず申し訳ありません。印刷は何とか10日までには製本に出します。相変わらず仕事が遅くてすいません。

*辻村 善徳 25期

ひと昔？前とくらべめと山へ行く気力、体力共なくなってきたかなと思いながら、毎回の「やまざと」で舟田さんや他の皆さんの活躍ぶりに刺激されて山へ想いをはせています。今後共OB会の発展にも協力していきたいと思います。OB会の皆様もお元気で。今年の冬は槍へ行こうと思っています。



***小屋酒場の打ち合わせ**

4月30日（水） ココス元町店 辰野 舟田 椿川

参加希望返信は21通+役員あたり

現役は5月31日から6月2日か新トレ

新主将は40期山崎君 小屋作業は秋を予定している

スポーツ振興課からは昨年同様30万円の補助金あり

辰野さんはお父さんの49日忌明けまで動けず

ダムのボートが修理中。期日は遅い方が使用可の確率が高い（結局5月20日修理済）。

秋の作業分も見込んで荷揚げをしておきたい。

登山道修復→前進基地を設けないと上部の整備は無理。

昨秋の作業では、現役がザックを担いでの下山が危ないと嫌がっていた。

秋の作業の下準備として、前進基地までの整備を行う。

大島、岡部の都合で日を決定する。

大島、辰野で、資材を検討。 岡部、椿川資材買い出しとダムへ搬入

椿川前日の金曜日午後にボートで資材を運搬、現役に手伝いを要請

舟田、参加希望者に案内を発送

*その後

現役より、金曜午後は都合がつかないとの連絡あり。

椿川さん、金曜日に出張が入る。船頭は水・木がダメとのこと。

おまけに、6月2日から倉谷・土清水線は8時半から5時まで拡幅工事で通行止め。

ムム、頭抱える…

5月30日 山崎主将に、新トレの時ならみんなが集まるのだから、誰か都合がつかないのかきいて欲しいと依頼。30万円の補助金があるんだよと強調

6月1日 (日) 辰野・椿川資材購入、ダムまで搬入。

6月2日 金曜午後に4人が動けると電話あり。

6月3日 県土木事務所・道路維持管理課へ、金曜午後車を通してくれるよう連絡。

6月4日 田村さんの衣装箱届く。(ご当人は、5月31日来沢。)

ボートが出せるならこれも、滞在用食料も、他あれこれも運んで欲しいなあ…ダムからボッカとなるとかなりキツイ。もう…オバタリアンに徹することにする。

「こっちにある荷物も運んで下さい」

次には、現役の出す車というのは、わが家のすぐそばのアパート在住の2回生長谷川君のだとわかる。

6月5日 夜、積み込みに来てもらい、車賃と人夫賃を渡し、「OBのボッカ力が心配だから、できるだけ小屋近くまで運んでおいて」

(一番最初は、「資材」を船着き場の横に降ろすだけでもちかけた話でありました。しかし丁度上馬さんから、ヘルニアの手術の予後が悪くて欠席の返事をもらったこともあり、「無理せず」「楽しく」のために強引に出ることにしました。

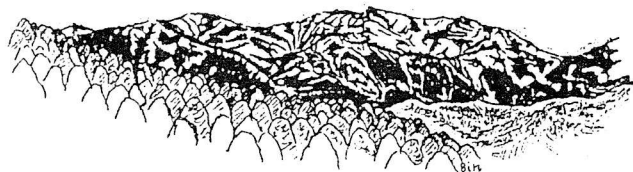
できるだけ多くのOBから会費を集め、現役にも流して、彼等の時間や体力を供給してもらい、円滑にOB会を運営する…が事務局長の仕事だと自覚。)

6月6日 主将から「時間がなくて、一部は船着き場から上がった道の横に残っていますが、後は小屋の下に運んであります」との電話。5時を過ぎていたので、通行止めも関係なかったそう。

6月7日 たしかに、小屋の下にきちんと積み上げられビニールをかけて置かれていました。残っていたのは、巻いた波板が2ロールだけ。現役がここまでやってくれたのかと、皆感謝感激。

作業してくれたのは、山崎茂雄君(3回生 主将)、高岩伸行君(3回生)

中野貴巳子さん(3回生)、長谷川夏樹君(2回生)



9 7 初夏山小屋酒場報告

13期 辰野 隆義

6月1日(日)

椿川君とホームセンター「ムサシ」で待ち合わせ。今回は、次回の便所建設もにらんでの資材調達を計画する。何せボートは秋には使えないのだから。

セメント20kg 6袋、トタン板10枚、その他金ゴテ、針金、他結構ボリュームのあるものとなった。そのまま車に積んで犀川ダムへ。建物の壁に寄せて積み上げ、シートを掛けておく。あとは舟田さんの連絡で、現役がボートで運べる所まで運んでくれるという。

6月7日(土)

工学部前に集合。いつものとおり一番近い私か最後となる。全員揃った所でダムへ出発。

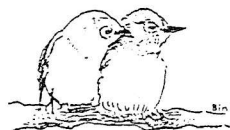
ダムには先日運び込んだ資材は跡形もなかった。さてどこまで運んでくれたか?これで今日の行動が決まるだろう。何せ社会的には壮年でも、体力的には老人に近いのだから。幸い、ほとんどの荷物はベルクハイムの上り口まで運んでいた。なんとOB思いの現役達よ!どうもありがとう。全員で一つずつベルクハイムまで運び上げる。

もっとも心配していたのは、前回完成させた水場が無事越冬しているかということであった。真先に上がった人の「ちゃんと出てる!」の叫び声に、ひとまず安心。我が目で確かめてみると、水量がかなり落ちている。缶ビールをバケツにつけて、すぐ点検にとりかかる。途中の水抜きバルブを開けてみるが、やはり出は悪い。取水場へ上がってみると、金網カゴは砂に埋まり、腐った枯葉がカゴの中に堆積している。ごみを取り除き、再び沢の中にセット。去年の水量に戻った。やはりこの給水法で正解であった。今後も問題ないだろう。

今日は小屋の土台の補修にとりかかる。石積みの土台部分は、建設当時のままで、長い間にモルタルがはがれ、ぐらつき出している石もある。苦闘の末運び上げた砂でモルタルをこねて団子作り。土台を水で濡らし、そこにモルタル団子を詰めていく。しばらくやっているうちにセメントがアルカリ性であることを思い知る。手がぬるぬるになってくるのだ。このまま続けると指紋がなくなるかも。気休めに軍手をしてやるがどうなるものやら。

体を動かしながら飲むビールはうまい。とにかく天気がよくて仕事もはかどるが、ビールも進む。なにせ10人にビールが80缶もある。町でなら缶ビール2本も飲めないが、今日は5本も空けた。アルコールにめっぽう弱い穂積までが同じくらい空けている。

高三郎組も戻ってきて夕食の準備。そして宴会。例によって13期生3人ダウン。田村大先輩はいつものとおり元気。平素の疲労の蓄積のため(週のうち3日が東京、4日が金沢の生活)、すぐ意識が途切れてしまい……。



6月8(日)

気がつくと朝。皆はもう起きて朝食の準備。高三郎組が早く出たいと早めの朝食になる。見送った後、作業開始。



まず流し場の土台となる石を河原より運び上げる。その数約50個。これを敷き並べ、塩ビパイプで排水口をつける。縁も平たい石を立てて並べモルタルで固定する。どうにか流し場らしき形となる。

カマドも、昔のものに石を乗せて、ナベ、ヤカンが上に置けるように調整し、モルタルで塗り固める。こういう調整が必要なものは吉本の独壇場。うまいものである。

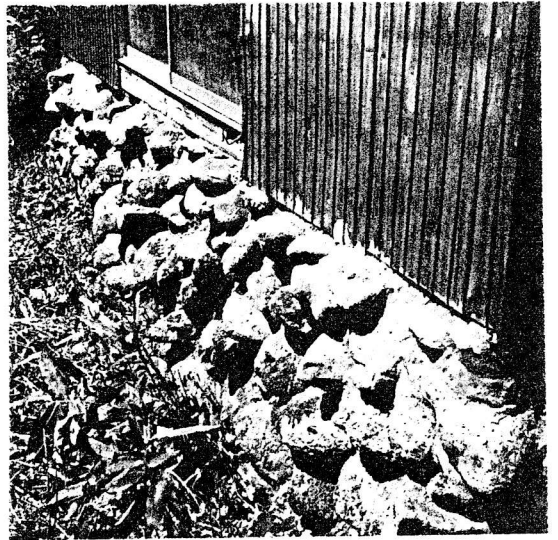
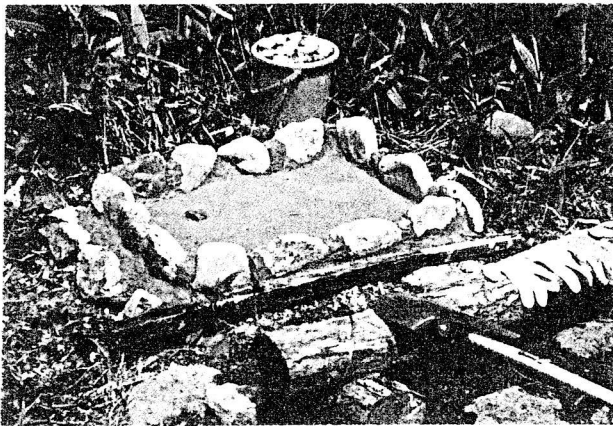
あとは砂のある分だけ山小屋の土台をさらに補強。2日間晴天が続いたため、モルタルの乾きも速い。

一段落したところへ高三郎組が戻ってきた。ご苦労様。さっそくビールをどうぞ。ともあれ喉が渴けばビールなのである。山小屋酒場ならではの極楽。

今年の初夏も予定どおり作業は完了した。小屋作業に携わって下さった現役の皆さん本当にありがとう。それから16期の北川君、清水君、田村大先輩、13期吉本君、吉田君、それに高三郎組の23期鳥越君、18期の椿川君、岡部君、そして我等が15期舟田さん。本当に皆さんお疲れ様でした。

秋もきっと山小屋酒場は開催されるものと思います。今度は便所を造りましょう。

皆さんの力を待っています。是非ともご参加下さい。ベルクハイムで飲むビールは最高です。



13期 吉田 穂積

山小屋作業から帰った翌日、腕、足、腹に、数十ヶ所赤いポツポツができて痒くなった。

何だろうと思っていた次の日、車の中に置き放しにしていたザックの上を0.5mm位の鮮紅色のダニらしきものが動いているのを発見。これがポツポツの原因なのかどうか、また、山小屋から連れ帰ったものかどうかは判らないが、とにかく駆除しなければと思い、車内を燻蒸することにした。

薬店では「自動車用の燻蒸剤がカー用品店にあるはずですよ」と親切にも教えてくれた。該当するものはあるにはあったが「ハエ、蚊、ノミ等の衛生害虫には効きません」との表示があり、やむなくアースレッドを車内で焚き、一晩置いた。使用上の注意には、パソコン、ワープロ等にはカバーをするようにとか、金属が変色する恐れがあるとか書いてあった。

何の対策もしないままにやったが、車内の機器(レーダー探知機、カセットデッキ等)には支障は起きなかった。

ポツポツは1週間程で治ったが、他の山小屋作業の方々は大丈夫だったでしょうか。

山小屋酒場に参加して

16期 清水 重仁

山小屋リフレッシュ会が何時から山小屋酒場になったか、個人的には定かではありませんが、昨年5月に続いて（秋は不参加）参加しました。

前日に滋賀の実家までたどりつき、当日4時半頃出発し、工学部前7時集合に、余裕をもって到着しました。それから3時間もたたないうちにBHにいたのだから、駒帰までバスを利用しダムまでも歩いてた当時においては、体内クロックも相当遅かったに違いありません。

さて、今回の参加者も昨年とほぼ同様のメンバーとなったようです。私はBH回りの補修作業に加わりました。何も意志表示しませんでした。が、元気組(?)が旧道整備に早々と出立していった結果です。缶ビール飲み放題のもとでの作業とも相まって、いや、40代半ばとしては当然なのか、かなりの重労働でした。そういう訳で、山小屋の夜の部も8時か9時頃には早くも閉店してしまったようでした。

まだまだやることもあるようですし、酒場を盛り上げるためにも、もう少し若い世代の参加を望みたいものです。（実際、田村さんと鳥越さんを除いては、私の期+-3年以内の人ばかりです。）

今後の参考になるかもしれませんので、今回実施したセメントミキシング方法を以下にまとめておきます。

1. 道具、材料

砂利、セメント、篩用角網（400*400程度）
小スコップ、攪拌用鍬、園芸用スコップ、水、
容器（600*500*200程度）

2. 手順

- (イ) 砂利を篩用角網にて篩にかける。木の根草の根多い。（詳細は辰野さんに聞いてください）
- (ロ) 篩後の砂を小スコップに普通盛りで約12杯容器に入れる。

- (ハ) セメントを小スコップにやや大盛で3杯容器に入れる。
- (ニ) 攪拌用鍬にてプレミキシングを行う。
- (ホ) ジョニ黒の瓶に約2-2.5本分の水を加える。
- (ヘ) 攪拌用鍬にて本ミキシングを行う。（詳細は吉本さんに聞いて下さい）
- (ト) 大体ミキシングできたら、園芸用スコップで容器の隅の未攪拌分を中心に仕上げミキシングをする。（詳細は吉田さんに聞いて下さい）
- (チ) 団子にして型崩れせず、異常にベチャベチャしていないことを確認。微調整後、使用する。

3. セメント塗布時の注意事項

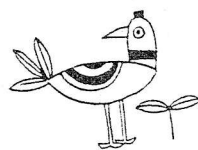
既存部分に塗る場合は、あらかじめ水を少し散水し、湿らせてからとすること。

追記 食事、食当について

メニューはふだん口にできないようなご馳走ばかりです。食当は舟田さんを中心に、岡部・椿川さんの両名で率先してやってもらえ、当方には声もかかりません。おっと、同期の北川さんも何か手伝っていましたね。

最後に、好天にも恵まれ幸いだったと思います。事務局、世話役の方、及び資材デポに協力いただいた現役の方に改めてお礼申し上げます。

（舟田の反省…いやあ、はるばる参加してもらって、つい登山道の方はきついかな？って、確かめるのを遠慮しちゃったんですよ。食当の方も、事前の打ち合わせをやってる気楽さで、つい内輪でテキパキをやってしまった…。参加した実感もてる運営を心がけます。改善されたか、懲りずに確かめに来て下さいね。）



埃を被った山靴を下駄箱の中から取り出し、簡単に身仕度を済ませ、慌ただしく玄関を出る。途中で16期北川さんをひらい、工学部前へ急いだ。

集まったのは、田村さん、辰野さんをはじめとする「いつもの顔」である。先程の北川さんの話では一山内にも、中野にも、清水（啓）にも連絡したんだけどなあ？であった。そういえば俺も、七間や、坂井や藤森くらいは誘わなければいけないな。（遠方の奴は無理かな？）

昨年より3週間遅れの小屋作業の始まりです（いつも、準備、連絡等苦勞している舟田さんに感謝する）。犀川ダムは、苦勞してホースや工具を小屋まで運んだ昨秋と違い、清々と水を湛えていた。今回は秋の作業の分も荷揚げしておくことになっているのだが、一体どの辺まで揚がったのだろう。セメント袋は以前（40kg）より軽くなったとはいえ25kgは重い。その心配は一掃した。塩ビの波板2ロールを除き、全て小屋下のテントサイトまで運んであった。（現役の連中に感謝！）

小屋に揚がると、水の音。昨秋引いたホースからはちゃんと水が出ています。さすが！

例年はない大量のカメムシの死体の歓迎を受け、小屋の内部を大掃除して昼食。

今回どこをどう整備するか…責任者としての宿題はもらっていたが、何分、お天気任せに、参加者数任せ…。天候には恵まれたがこの人数では、今秋の作業の下準備（補助金が今年もあり、現役は秋に登山道修復を行う予定）と、昨年整備した部分の荒れ具合の検討くらいであろう。

午後から、舟田、北川、椿川、鳥越と私の5名で登山道整備に出発。昨年と同様、旧道の枝払い、及び、ツルハシ、クワを使ったステップ切りを行う。登山道は昨年2度の作業の成果があり、登山道らしく見える。目につく邪魔そうな枝を払っていくうちに道巾も満足なものにな

るが、ほどほどにしつつ前進を心掛ける。それでも800m地点で予定の4時となり、鳥越君が日帰りしなければならないこともあり、引き返す。

上りではあまり気にならなかった傾斜も、下りでは「ザックを担いでではきついな」になる。明日はやはりロープを張ろう。今日も途中まではロープを担いできていたのだが、椿川と、ここここ、と確認しながら下りる。

小屋に戻ると技術者ぞろいの13期の人と16期清水（重）さんがカマドを仕上げていた。河原から砂を運び上げるのがたいへんだったとのこと。

舟田コック長の指示のもと夕食作り。焼肉用鉄板も、米や調味料類も、先の資材とともに現役に運んでもらったとのことで、またしても現役に感謝。

酒場も盛り上がり、アルコールのピッチも上昇。現役時代の思い出話が多いが、飲み食いの何百倍以上に口が動くのは何といっても田村さん。これに加え、今回は清水さんの話がとてもおもしろかった。清水さんの繊細な心情が伺える話であった（例の日記の話）。清水さんの風貌にはミスマッチのような気もするが（おっと、たいへん失礼）。ビールから日本酒に変えたあたりから（最近いつもそうなのだが）、酔いの回りが速く、酒場の話も覚えてはおらず、いつの間にシュラフに入ったのか、以後はまったく



記憶にありません。(夜中に小キジ打ちに出、こけてしばし行動不能でありました。その証拠の傷が、翌日の汗に疼いたのでありました。)

7日、朝食後、我が登山道整備班は早々に出発の用意。メンバーは田村、舟田、椿川と私。昨日の作業終了地点へと急ぐ。昨日の酒が残っているのか、上りの足が重い。とそこへ、登山者が来るではないか。一瞬我が目を疑ったが、紛れもない事実。それも一人、二人、三人と、続々上ってくるのにまたびっくり。この高三郎に上って来てくれる人がいるのだと思うと、今この道を整備している自分の姿に誇りと自信が沸いて来る。「さあやるぞ!!」と気合を入れる。最終的には14、5人の登山者に会った。時には「ご苦労さん」と声を掛けられたり、「頂上まではどれくらい」と尋ねられたり。後者には残念ながら、整備は分岐手前の鞍部までで後はかなり覚悟してとしか返事のしようがなかった。ここまでの急な登りに皆一様に舌を巻いている表情だった。

秋の作業のためのテントサイトをどこにするか?どちらにせよ836Pか951Pのあたりしかない。「836mでは低いか。」「いやあまり高いとテントをあげるのが辛い。」「やはり小屋から出入りするか?」「ここまでの往復に3-4時間は

かけているぞ。2日、3日となるとますますロスがかさむ」「上の方が圧倒的にブッシュが濃いもの。これまでみたいな進み方はできないよ」と、いろいろ考えたが、836P付近の平らな所をテント場と決める。(前方に951P前高が見え、眺めもよい)。作業の結果、3-4張のテン場を確保する。在りし日、高三郎と見越の鞍部にあるワンゲル平にテントを張り小屋作業をした記憶からは隔世の感があるが、これも時代。何年か先はワンゲル平であることを夢見て、ここをあとにする。

昨日の宿題、急坂に戻り、ロープを張る。先程登っていった人達に早速役立ってくれるか?しかし、今回のロープは30m。2箇所とちょっとでなくなる。次回はもっと用意してこなくてはと肝に銘じて下山する。

秋の小屋作業の下準備も出来、かなり満足出来る小屋作業であったと思う

さて、また舟田さんから、今秋の小屋作業についての宿題が来るはずですが。天候に恵まれ、人手にも恵まれるなら、考え甲斐があるというものですが…。どうしようかな…。

皆さんの協力をお願いします。



*実行記録

6月7日(土)

午前7時 工学部前集合

小屋作業隊 辰野 隆義(13期) 吉田 穂積(13期) 吉本 良治(13期)

清水 重仁(16期)

登山道補修隊 岡部 伸一(18期) 椿川 利弘(18期) 舟田 節子(15期)

北川 隆次(16期) 鳥越 伸博(23期)

小屋番 田村 昭夫(3期)

鳥越さんの車で工学部キャンパスに着いたら、もう重仁さんが来ていた。滋賀の実家を早朝4時に出てきたようだ。

「何?これだけ!先細りですか?」

「申し込みはあったんだけど…仕方ないわね。」大島さんには町内のアメリカシロヒトリ駆除作業が入ったし、山本君には就職試験が飛び込んだ。野田さんなんか不可の返信だったのを、「都合がついた」と連絡をくれて、それがまたダメになった。私にしても、浅の川の清掃行事が重なり、班長だったから班の割り当て分を全部先に掃除して、町内のうるさいバアサマには丁重にごまをすり、主人は拜み倒し、今朝さらに掃除し直して出てきた。こんなことをくどくど言わない皆にしてもそれぞれに無理や不義理を重ねている。会社や家庭や地域を背負っているのだから…仕方がないと言うしかない。それでも都合をつけてきた人達と、酒場を大いに楽しむことにしよう。

今年は少雪だったうえに、昨年より1ヶ月近く時期が遅いこともあって、ダムサイトの道はすでに夏草がボウボウ。ダムには30台近い車があふれていて、倉谷で何か?と思ったが釣り人達の車だった。

昨年の田村さんの力作の架橋は…一部は使えたが一部は崩れていて、出島の手前のものにいたっては、最後尾を歩いていた田村さん御自身が一緒に落ちてしまった。ということは、前を歩いていた誰もその橋には足をかけなかったこ



ムササビ

とになる…(苦情のもっていきようがないというか)。善意の橋も、まともなものとなるとなかなか難しい。田村さんは早速の小屋番仕事とマークされたよう。

吊橋を渡ったところからきれいに草薺がしてあり、当の本人が作業中だったので聞いたら、酒多飲日記に出てくる山下さんだった。彼は倉谷を訪ねてくれる人達のために、ボランティアで道を開けていらっしゃるとのこと。続いて、川沿いの仮設小屋には羽場さん夫婦が山菜採りに来ていらした。スポーツ振興課の尾崎主査の姉夫婦である。しかとお世話になっている挨拶をしておく。

現役に頼んであった荷物は小屋の下にきちんと積みあげられてあった。おねだりがエスカレートするばかりで内心忸怩たる思いのあった私には、この誠実な仕事ぶりにジワッとくるものがあつた。ちょっとした一コマで元気になれる。この山小屋酒場も盛況とはいかないが、小屋酒場が続いているということが、多くのOBにとって元気の素になると信じている…。

上がっていくと水音がきこえた。「やった！」である。昨年の力作は機能していた。辰野さんが点検に行かれし頃の泥水の後、大量に水があふれだした。しばらく流した後、バルブで水量を押さえる。

小屋をあけたらギョッ。カメ虫のミイラの山に、白まだら…。現役時代も小屋開きに行ったけれど、こんなにひどくはなかった。昔は部員が冬近くまで出入りしていたからか？一週間前に現役が新トレで来ているはずだけれど、覗いたら身の毛がよだったんでは…。とにかく中の物を皆外へ出し、徹底的に掃除。白まだらは拭きとれるので、ローソクではなく鳥の糞？となったが、あとで上馬さんにヘビの仕業と教わった。

この時、得体の知れない越冬物は皆処分されることになった。昨年より古いものはない筈だが、田村さんに何かあっては困るのだ。田村さんは

「中を見るのが怖い」(?)

と言って清掃中は上がっておいでなかった。きれいになってから

「あれ〇〇は？□□は？」

「ハハ…もうないですよ」

昼食後、11時半から登山道修復隊は旧道をめざす。トリさんが

「ここからは16年ぶりですよ」

と言っていた。実際、倉谷や高三郎があるから世代の離れたOB同士でもつながってしまうのだ。白山も共通の思い出がある場所だが、何といても万人が登るし、国立公園を自分達の山とうそぶく訳にもいかない。小屋や高三郎の伝統は重荷でもあろうけれど、あっさり世代を乗り越えさせてくれる宝物でもある。重荷にするか、宝物にするか…。ともあれ現実の私は今、仲間と高三郎にとりついている。

(作業については岡部さんの記事を参照下さい)



せっかくの報酬の宴をあきらめてトリさんは帰宅。明日は町内のビーチバレーの試合があり、今晚はそのための練習が入っているそう(町内の貴重な若手人材だものね。その晩は名倉夫人の父上のお通夜の報も入ったそうで、やっぱりご縁がなかったとあきらめがついたそう。思えば学生時代は、本当に自由でしたね)。

さて「初夏」の酒場は山菜シーズンも過ぎてしまったので、焼肉とトリ鍋がメニュー。ボートのおかげで、鉄板やバーベキューセットも運んでもらえ、メニューのバリエーションも広げられそう。水場があるのが何ととっても便利。約1時間の歩行で、食材のみ持ち込みなら、皆のセカンドハウスとして楽しんでもらえそうに思う。

苛酷(というと、参加者が増えないかも)な労働と、おいしい食事とアルコールで、もう暇がくつつき始める。コーヒーで持ち直し、よもやま話。高村さん達の追悼集のことで、清水さんの日記にびっくりしたことを言うと、彼は中2からずっと日記をつけていたのだそう。

「でも5年の時か、僕は6年で卒業したけれど、5年で川端が金沢から出ていった時に、書くのを止めました。」

(後日談--彼は編集長の苦勞に非常に同情してくれました。それで、その大事な日記から当時の学生気質を浮き彫りにしたものを数編まとめて、会報に連載することを約束してくれました。その後日記は燃やしてしまうのだそうです…奥様に読まれないうちに)。

労働不足(?)の田村さんがなかなか寝てくれなくて、話相手がいなくなったら今度はハーモニカを始められた。私達が昔話を聞けるのはありがたいが、それを同世代の仲間と酒の肴にできるものならどんなに田村さんも参加のし甲斐があることか…。違う世代との交流も楽しいけれど、何といても心寛げる仲間は同世代なのだから…何とかできたらと思いつつ、ハーモニカと倉谷の瀬音を子守歌に…。

6月8日

昨日炊き過ぎた御飯を温め直して朝食。今日は田村さんが上へ。北川さんが小屋作業に回る。清水さんが帰る前にと、記念写真を撮って作業隊は出発。私も飯炊き女に徹してみたいが、何といってもスポーツ振興課に報告してくるのは私、現役に作業状況を連絡するのも私となると、やっぱり現場に出たい。高三郎の連チャンをやるうちが華!と、カメラ、鋸、行動食、水をザックに詰め込む。

(このあたりも岡部さんが書いているので省略)

この日は15人近くが登ってきた。分岐手前でどうする?になるだろうな。といってこんなOB隊4人(さらに内訳は女1、還暦過ぎ1)でどれだけのことができる!椿川さんがはねかえった木で鼻の下を切ってしまった。^{生傷は}すぐ止まったものの一先日来、とても気になっているのだ。こんなボランティア作業に出てきて、怪我をしても、物好きの勝手にしょにしかないのだろうか。ただ「やろう、やろう」ではなく、傷害保険とか、何らかのフォローをきちんとやっていかなくては。

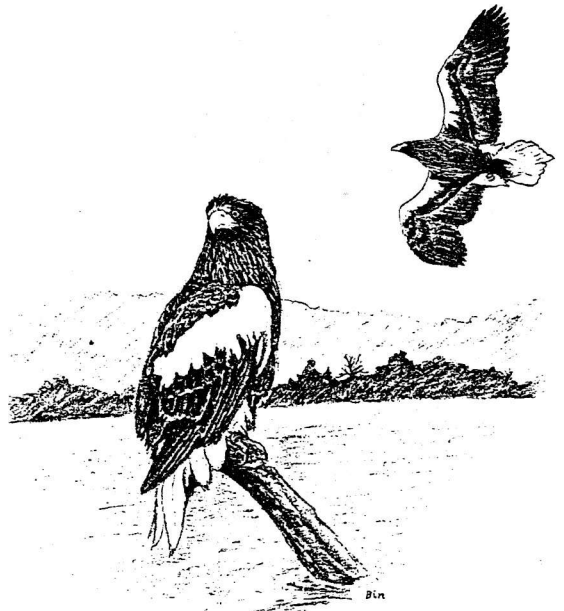
小屋に戻ると立派な流し台ができており、カマドも補修されていた。今回は絶対釜炊き栗飯の登場である。お屋は豊富な水を利用したの素麺。初夏にはグーのメニューだったが、これまで誰も小屋で素麺を食べた記憶がないという。これからいろんなメニューを楽しんでいくことにしよう。現役にもすべて小屋への寄贈品で自由に使って下さいと言ってある。小屋を利用するの思い出を持った人が、また小屋を大事にしてくれるようになるだろう。

辰野さんが便所構築のための採寸をしておいた。小屋の入口の壁を利用し、もたせかける形で便所にする。水を引っ張ってきて、使用後にバルブを開いて流す簡易水洗式。今の利用人数であれば、自然の浄化力任せでOKということだった。辰野さんも大島さんも水回りはプロ

中のプロ。下素人の現役ばかりでもやれた時代はそれはそれで良かったのだし、今は現役にパワーのなくなった分、プロの技術を持つOBが育っている。なるようになるもんだなあ。疎遠であればあきらめなければならないことが、資金で協力してくれるOB、技術で協力してくれるOB、時間と体力を提供してくれる現役と、連絡をとりあうことでやっていけるのだ。

明日戻るのか、いつ戻るのか定かではない田村さん用に小屋の内部を整頓し、施錠して小屋をあとにする。かつて、おそらくこれが最後と小屋を後にした日があった。さあ、また今度とあとにできるこんな日がきたことを快い疲労の中で感謝していた。

「またこいや。」38期正善君('95小屋作業CL)が残したドアへのメッセージは、BHの精神そのもののものだ。



オオワシ (ワシタカ科)

犀川源流森林生物遺伝資源保存林の設定と高三郎山登山道の整備について

森林生物遺伝資源保存林とは

林野庁では、平成8年度から9年度にかけて、全国で13か所の国有林に、「森林生物遺伝資源保存林」を設定することにしており、犀川源流もそのひとつになっている。目的は、その名のとおおり、森林に生育・生息するすべての生物を遺伝子資源として保存しているというものである。

ところで、林野庁の特別会計は、伐採した木材を売った利益で職員の給料を払い、また造林するという独立採算制が破綻をきたし、莫大な赤字を累積していることは周知のとおりである。しかし、一方では、森林が果たす国土保全機能に対する国民の認識も深まりつつある。今回の保存林の設定は、そういった森林の保護を前面に出した、いわば、自主規制ともいえる措置なのであるが、実は、同様のものとして、既に「森林生態系保護地域」が、白山や白神山地などに設定されているのである。今、また、保存林の設定という“火花”を打ち上げるのは、林野庁に対する行革の風当たり（環境庁不要論もあるが）に関係があるのではと勘繰りたくもなるが、ともあれ、悪いことではなからう。

大阪営林局の調査に同行

犀川国有林を所轄する大阪営林局から、県自然保護課に現地調査の同行依頼があり、私が行くこととなった（白山自然保護センターの上馬さん（15期）が行くことになっていたのだが、都合が悪く、3年ぶりに自然保護課に戻った私にお鉢が回ってきた）。もともと犀川源流一帯は、県の自然環境保全地域に指定されているということもあるのだが、要は現地に詳しい者に来てほしいということであった。

1回目は高三郎山である。当初の予定では、新道の砺倉分岐までの往復であり、また、県議会の会期中ということもあって、私は行かないことになっていた。ところが、山頂まで登る計画に変わり、金大の山小屋に泊まりたいということになった。先方は小屋の地主であり、頼まれれば断りきれないのであるが、一人仙人みたいな人が住んでいると言ったことが、いたく相手を不安に陥れたようで、結局、私が行かざるを得なく？なったのだ。

6月23日の夕方、ベルクハイムに入る。一行は、大阪からの2名と金沢営林署の2名に県森林管理課Y氏、金沢市林業振興課M氏を加えた計7名。事前に舟田事務局長に小屋の使用をお願いしてあったため、田村仙人は首を長くして待っておられた。ビールを飲みはじめると、田村さんは炭焼きの可否を尋ねられた。酒の席ということもあり、局や署の上司はおもしろがって、担当の若い森林官に「お前に一任する。明日からここで勤務せよ」などというばかりで、いったいどうなることやら……。ともあれ、楽しい語らいの夜は、田村さんやY氏（私も悪のり）のハーモニカが止めを刺した。

翌朝、田村さんは早く起きて、レトルトのご飯があるというのに、飯を炊いてくれた。ほとんどが二日酔い状態で旧道を登る。春の小屋作業に参加できなかったこともあり、未整備区間では、できる限りナタをふるった。先頭の私が立ち止まって伐り出すと、後続の営林局・署の面々もナタを抜く。最後尾の田村さんも頑張っておられたのだろう、我々が頂上で昼飯を食って下りはじめたところで、ようやく出会った。帰りは、途中2か所で略式の植物調査をしつつ、新道を下る。荒れているぞとさんざん脅かしていたのに、分岐の赤布に記されていたイニシャルの人たちであろうか、若干ではあるが伐り払っており、案外歩きやすかった。しかし、前半の無理と水不足がたたったのか、最後の下りの辛かったこと。やっとの思いでベルクハイムに到着した。一息いれ、街へ出る予定を変更して小屋に残る田村さんを後に、ダムへ下った。だれもが、田村さんとベルクハイムに、称賛と感謝の言葉を発した。そして、田村さんも今回の来訪を喜んでくれた。私は、与えられた任務をまっとうできたのではないかという思いに、疲れが満足感に変わるのを感じていた。

2回目の調査は、6月30日から7月1日に行われた。メンバーは、大阪からさらに1名と金沢営林署長も加わり、M氏と私で計8名。30日の夕刻、富山県上平村西赤尾の民宿に集合し、翌朝、ブナオ峠から赤摩木古山、見越山、奈良岳を往復した。梅雨の最中、雨を覚悟していたのに、今回も晴れ。しかも、この時期のこのコースは以前から歩いてみたかったので、山に向かう気持ちは、高三郎のときより前向きであった。大門山分岐までは、昨晚のどぶろくが効いて、足が気持ちについていなかったが、前回にこりて水はたっぷり持っていたし、見越の鞍部（なため平？）で冷たい水も得られ、元気回復。見越・奈良間に草木が繁ってきていたほかは、概ね快適に歩くことができた。なお、このコースは、富山県が白山国立公園の公園計画に基づく歩道として整備したものである。

調査としては、本県ではごく限られた生育地しか知られていないタテヤマリンドウを見越山で発見したほか、ギョウジャニンニクやヒメシャガなどの希少な植物もいくつか確認できた。現在、高三郎の分と合わせ、200種余りの植物リストを作成中である。

ワンゲルとの関わり

さて、この調査に先立ち、舟田事務局長から手紙をいただいていた。それは、そもそも登山道とは、だれが維持・管理をしていくものなのか、現在、我々が取り組んでいる高三郎での登山道整備に、営林署などから何らかのバックアップが得られないか、といったことについて、機会があればきいてほしいという趣旨であったと理解している。

もちろん、営林局や署は、管内の国有林を広い意味で管理することは当然である。現に新道登り口の金山谷出合にある小屋（田村さんによると、松任在の人が建てたもので、休日に山菜取りやイワナ釣りにきており、怪しい人物である。もっとも、あちらもこっちを怪しいと思っているだろうとのこと）については、土地の無許可使用であり、対処しなければと言っていた。また、私も現役時代、アルバイトで犀奥の国有林界の標柱をブッシュを漕いで探し出し、回りを刈って赤ペンキを塗るという作業をしたことがある。そうした境界標識やそのための巡視路の管理は、営林署の仕事ではある。しかし、不特定多数の人が利用する登山道については、営林署は土地を貸すという立場をとるに過ぎない。このことは、白山でも同じことで、県は中宮道や釈迦新道などの国有林内の道や避難小屋の敷地を正式な文書により借り受けている。したがって、その管理責任は県にあることになる。つまり、登山道の維持・管理、そして、その不備のために起こった事故については、設置者が責任を負わなければならないのが原則である。

もし、高三郎の道の整備が、営林署の依頼で行われているのなら話は別であるが、そうではない。営林署とすれば、道があればそれに越したことはないが、自らが積極的に設置し、維持・管理する気はないということである。それは、今回の遺産資源保存林の設定でもわかるように、もともと、犀川源流は保健休養も含めた利用面を考えてはいないということなのであろう。私が、昨年、営林署に出向いて了解を得たのは、登山道整備のために必要な木竹の伐採についてであり、「もとあった道の再整備であるから、文書での許可申請等は不要」との回答を得たというに過ぎない。

それでは、高三郎の登山道の維持・管理責任者はだれか。それは、私の理解では、不明としかいいようがない。多分、もともとあった炭焼きなどのための杣道を、ワンゲルが整備したのであろう。金沢市からの助成にしても、市が設置した登山道の整備に対してではなく、市民のスポーツ・レクリエーション振興のためにボランティア活動をしている団体への支援なのである。いうまでもないが、大学もしくはワンゲルOB会が、登山道の設置者として正式に国有林を借り受けているのではないし、また、そうすべきでもない。飽くまで、自主的な活動にとどめておくべきだと私は思う。

登山者の不注意による遭難やケガにまで、登山道の設置者や管理者の責任が問われるというのは馬鹿げているし、そういう風潮は嫌いであるが、そうはいっても無視できる問題でもない。事実、危険箇所への立ち入り禁止の表示がなかったために、起こった事故の責

任を取らされる例は少なくない。これは、山に限ったことではなく、抽象的にいうなら、個人の自由、権利、責任と社会との関係のあり方といったことにつながる大きな問題ではないだろうか。

余談であるが、私が石川県庁に勤めることになったきっかけが、実はこれなのである。主将をしていた年の小屋作業で、高三郎から見越、さらに大門、奈良がつながった。さっそくPRをと、新聞記者をしていた15期の松林さんに連絡したところ、写真入りで記事になった。翌日、県の環境保全課（現自然保護課）から出頭命令。いわく「あそこは県の自然環境保全地域になっており、木を伐ってはいけないんだよ。君達のやったことは決して悪いことではないのだが、新聞に出されては困る。それに、大学のクラブという流動的な組織で、ずっと道を維持していけるかね。もし、道が荒れたために遭難事故が起こったとしたら、責任問題になる場合もあることを忘れてはならない。」そして、いくつかの資料をもらい、自然保護行政という仕事のあることを知ったわけである。

ところで、事務局長の手紙には、もうひとつ、高三郎の山頂からの展望がよくないことに関して、（伐採等の）規制をどのように解釈すればいいのか？ということもあった。これについては、“余談”で述べたとおり、県の自然環境保全地域（概ね分岐から県境稜線までの一帯）に指定されており、許可なく木竹の伐採をしてならないことが条例で定められている。つまり、立ち入ることまで禁じているのではないが、自然の保護を目的とした地域指定であり、眺望がいいとか悪いとかは関係のない話なのである。そのあたりが、保護と利用を目的とする自然公園（国立・国定・県立）とは、似て非なる趣旨の法に基づいている所以である。それでは、分岐から上は道刈りもまったくしてはならないのか、と問われれば、そうとも言えない。というのは、昨年、伐採の許可申請をする方向で、自然保護課の担当係と一応の協議をしているからである。しかし、問題は残る。果して、ワンゲルOB会としての申請で通るのか、いや、そもそも許可申請という行為をすべきなのか。今、もう一方の当事者にもなってしまった私は、20年前に言われたことを、今度は自分で自分に問いかけている。まったく、因果は巡るとはよくいったものである。

おまけー今後の高三郎登山道整備についての私見

長々と要らぬことも述べてきたが、一ワンゲルOBとしては、これまでの方針どおり、高三郎の道を整備すればよいと思う。もちろん、違法行為や後々のトラブルを避けるために十分な配慮を要するし、維持・管理の問題についても考えておく必要はあろう。ただ、そのあたりが明確ではない山道が多々あるということも、また、事実である。

今後の整備の方法については、旧道836m地点に前進基地としてのテントサイトを設けたということであるが、そこまでの水を含めた荷揚げを考えると、その方法がよいのか、私には疑問である。我々が今回の調査山行でやったように、山頂まで刈り払いながら登るという速攻型でも、ある程度人数がそろえば、むしろ効率的ではないだろうか。登山者の身になって考えれば、濃密なブッシュの区間を残すより、完璧ではなくとも均一に歩ける方がよいに違いない。前述したとおり、あの新道でさえ、少し手が入っただけで、随分と歩きやすくなったように感じた。また、せっかく快適な小屋があるのに、最大限利用しない手はない。

なお、新道のヤセ尾根は雪がつかないので、5月中旬のシャクナゲのころでも作業は可能である。いい時期に登る楽しみもあっていいと思う。

（19期 梅 典雅）

登山道を考える



15期 舟田 節子

<王様はハダカだ！>

登山道が途中で消えてしまった。藪をかきわけ稜線を探し、ああこの道は既に廃道なのだ！とあきらめかけると、途端「大通り」に出くわす。

種あかしは「行政区が違う」なのだ。〇境をはさんで、舗装道路が砂利道に変わることもよくあるが、一応道は続いているし、見渡せばなるほどの標識だってある。

しかし、登山道でこんな「行政区が違う」をやられると、まさに遭難しかねない。

そんな遭難の責任まではとれない……という訳で、どの道がどこまで整備されたか？の情報も公に流されることは少ないようだ。

「登山道は生き物」……ガイドブックにまとめるまでも時間は経過してしまうし、関係市町村に事前に問い合わせるよう、どのガイド本にも付記してあるが、現実にはそこを实际歩いているような担当者はろくにいない。「わかりません」だの、手入れをしたの確報がない限りは廃道状態のままとの返事が無難になってしまう。

そういえばやたら通行止の林道も増えた。雪解け後の、あるいは梅雨明後の安全確認が終わらないうちは、とりあえず「通行止」なのだ。その表示を出しておけば行政は責任を免れる……私達の方は毎度「本当の通行止」か「仮の通行止」か？勘繰らなければならなくなる。

つまり「ありのままの情報」が欲しくても、最近では「責任逃れのからんだ情報」しか手に入らない。

「高三郎」以前に、まずそんな社会に私達は生きている。インターネットだ情報社会だと騒いでいても「王様はハダカだ！」の情報が流せない社会へと、私たちは進んでいるのだ。

<登山道は誰が？>

法律だの、条例だのがある。そんなものの隅々まで知っているのはその筋の専門家ぐい。まして「保全」と「保護」の区別、さら「特別」がつくと、どう違うのか、どこから保全地区で、どんな明快な根拠があるのか……役人には判らない。おまけに「法律上はそうなっているが……」とか、「申請を出すべきか……」となると、ますます判らないうえに、一体何のための法律か？と首をかしげてしまう。

この手の条例で規制すべき人種達は、利私欲で巧妙に活動し管理の目を免れている。そしてまともにお伺いをたてる善意のボランティアには、条例を楯に冷やかなブレーキがかかる。

- ・巡視路の管理上、適宜やってもらえば有り難い。
- ・しかし公表してもらっては困る。責任はとれない。とる立場ではない。
- ・規制をかけてある。大々的にやれば違法行為である。
- ・もちろんバックアップなし。物好き！物好きに伐開をやって傷害他のトラブルがらってもそれは「物好きの勝手」

事務局の私は、この最後の点が気にかかり、この点を明らかにしてほしくて、楳さんに、もし話題として出せるものならと依頼した。しかるに確認できたのは20年前と変わらず、前記の3点まで。

楳さんは、この問題に対して外から内の立場に変わった。曖昧にしか答えられない立場が身に滲みているだろうし、3枚の原稿でも語りつくせぬ思いもあるものと思う。つい、気安さで頼んでしまったことを悪くも思うけれど、心あるOB、現役なら「高三郎の登山道とは？」がひっかかるだろうし、現役の立場で究明し難いものであるなら、それこそOBの立場、人脈から何らかの答えを引き出したい、改善したいと願ってのことだった。

所詮、高三郎に登りその手で鉈を振るえるような方達は、私見を披露する立場でもなく、改善を約束できる立場でもなかった。

「登山道は誰が？」

「ボランティア整備へのバックアップは？」

「分岐から上の整備への規制は？」

といった今後への展望への指針を何らつかめることなく、営林局の調査山行は終了してしまったのだ。

「責任のかれのからんだ情報」レベルでなら「廃道」と記述するのが妥当である高三郎の登山道の現状。そんな道の整備に感謝状がくるところか、「道の整備をさせて下さい」と許可申請をしなければならないなんて…。

山村はなくなり、生活道路として維持されていた山道に手をかける人もいなくなった。それなのに、お人良しをあてにしたような許可申請システムは残り、ボランティアパワーを活用していこう、支援しようという姿勢は生まれていない。

河川にした所で鑑札を売り、釣り人への還元施策を行っているではないか。登山道は無料の発想そのものがもう時代にそぐわないのだ。中高年登山者は快適な装備と衣服にお金をかけ、本もビデオも揃えている。白黒で当たり前だったガイドブックがどんどんカラー化され、それでもペイしているのに、登山道だけは無料で、整備してあって当たり前が通用しているのだ。

個人であればとくに破産している日本の行政は、かつてケネディが言ったように「国が何をしてくれるかではなく、我々が国に何をできるか」へと、民主主義を問い直さなければならない所に直面している。それは細かい施策の中でも、民活、ボランティアの育成へと反映されてこなければならない。

登山道整備基金の創設、行政の中での窓口設置、管理、維持、連絡、広報。母集団が大きくなれば安くできるはずのボランティア保険。そんなバックアップがあれば、もっと多くの人が

自然を財産とする活動ができるだろうに。

<そして、高三郎>

部は変わった。もう昔のような「ハイ」で動くような兵隊はいない。車が使えても、倉谷はかつての徒歩で通うより遠くなった。鎌も鉈も使ったことがない若者達に、登山道整備は現実離れといえる体験なのだ。

そう、あの頃よりOBは増えた。数字の上では500名を超え、金沢近辺に3分の1は住んでいる。しかるに多くのOBには「山」は過去の話で、それに「整備」がいたら、異次元の話になってしまう。

「山頂まで刈り払いながら登る速攻型」をやれる人間とは誰のことで、「ある程度的人数がそろえ」られるとは、どうやったらそろえられるということなのか？おうかがいしたい。もっと現実をみてほしい。今必要なのは、そんな理想論や架空論ではない。

人が掃除し、水をひいた快適な小屋で泊まり、整備し終わった分岐までをあっさり通過し、その後が一日で通過できたから、あとの整備も一気にできるはずなんて、どうしてそんな安易な図式が導けるのだろう。かたや、給料をもらい職務として山に入り、事故にも相応の保障がつくだろうが、かたや休日をつぶし、あるいは休暇をとり、ボランティアで山に入ってくれている。無理せず、本人にも楽しく、着実にやってもらえれば…それでも事故があったらと私は心を痛めているというのに、一体誰が、そんな速攻型で一気に道を開けと指令できる立場に立てるというのだろう。現在の日程は、一応C.L.の都合を優先としているが、現実には土曜休暇をとっていただいている。本当にやる気があって、単にその日だけ都合が悪いのなら、他の日、もちろん、シャクナゲのきれいな時期にも自由に刈り開けに入っていただいていたいいことだが、そんな行動を耳にしていない。ようするに私には、梅氏の私見は何の提言とも受け取れなかった。

高三郎とどう関わっていくか、こんな曖昧さをどこまで受け止めてやっていけるのか？指針を立てねばならない。

まず現役にとっての高三郎の位置づけは？新トレは、奥三方と医王山が選ばれたことがある。奥三方は奥池林道の崩壊で登れないし、医王山は県立自然公園となり、さらに公園化が進むことになった。合宿につなげるだけの幕営生活が周囲への気づかいなくやれて、登りごたえがあって山頂のフラッペの楽しみもあり、市街からもそこそこの距離となると、なかなかあるようでない。伝統にいやいや縛られてきただけでもないのだ。

利用するのなら、周囲がどうであれ、利用するだけの整備を行っていけばよい。が、はっきりしているのは、整備をその年にやるかやらないかはその代の自由であっても、やらなかったら次の代はその利息分まで整備しなければならなくなるということだ。つまり、完全に手をひくのでなければ、実際には毎年整備していくを部の指針とするしかない。

スポーツ振興課からの30万円は、ありがたい追い風だが、彼等の方もあくまでボランティアへの支援であって、お金の受け渡しをはっきりさせること、仕事をしたという証拠を提示することのみ。指示は出さず、責任ももたずの立場である。

今回、高三郎にまつわる曖昧さをはっきりさせようと試みたが、昔のままに曖昧であることを確認するに終わった。こんな曖昧のままと心得て、現役、OB会、小屋酒場は、高三郎との関わりを考えていかねばならない。

フイン酒多飲日記総括

金沢大学ベルクハイムにて
ワイン酒多飲

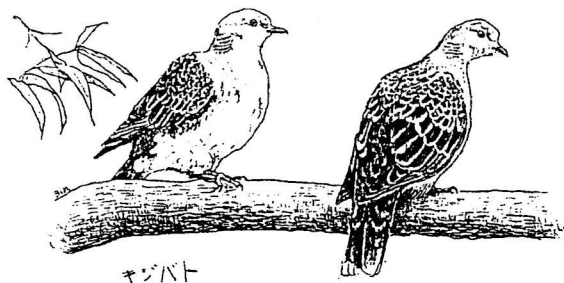
色即是空。空即是色。

物質の極限は「超弦」であるというのがほぼ定説であるが、超弦の長さは 10^{-33}cm と言うごく微細なもの。存在していても観測出来ない。従って「空」である。これが観測できる「色」を形成している。

今、物理学者達は超弦理論を確立することによりやっきになって取り組んでいる。数式化することが自然科学である一つの条件であるが、はたしてこの理論は数式化出来るだろうか。量子力学を超弦理論に置き換えることが可能か？各量子は弦の振動の状態として表現できるだろうか。無限大が現れて理論に破綻を来さないか。

自然は深遠で人間が数式などで表現出来ないものかもしれない。真理は単純であるが人間が複雑に考えているだけなのかもしれない。

人間の生き方にしても素朴が一番良い。釈迦もイエスも教えたことは単純で素朴である。人間の社会は複雑性 (complexity) に向かう。故に、単純さや素朴さが軽視されやすいが、複雑さを形成するのが単純な繰り返しであることを忘れてはならない。



田村教祖様の衣装箱には、分厚い原稿用紙が納められておりました。きけば昨年ものしたワイン酒多飲日記は、生涯初めてつけた日記であったとのこと。そして今回はいよいよ60年の波瀾万丈の半生を、倉谷の静寂の地でまとめてみる…とのことでありました。

ところが、まあ、何でありまして…原稿不足に悩む編集長は「いきなり大作をと思うから筆も重くなるのではございませんでしょうか？この頃の小説家は、連載物で書き溜めてそれが後には大作にまとまるようです。会報毎に少しずつ、思い出を語ってみるのもコツなのではないでしょうか？」とご進言。

「すぐ乗るタチで」と早速送っていただきました。まことに有り難いことです。

そんなふうにも、気軽に青春の一コマ、日常のエピソードなどなど…多くの皆さんに語っていただくとうれしいのですが…。

原稿求む！

万年大学生のすすめ

0期 田村 昭夫

Ist das das Leben? Ja, noch einmal!

(これが生だったのか、よし、それならもう一度!)と云うニーチェの言葉に私は励まされた。息子が来年大学進学の時を迎えるのを機会に、私はもう一度学生に戻りたい。そして物理や数学を学びたい。クラブは無論フットボール。そして死ぬまで学生の身分でいたい。

考えてみれば、大学とは知的遊園地が本来の姿である。英語のschool(学校)はラテン・ギリシャ語のschola(余暇)に由来する。停年退

職者が暇を持て余して知的刺激を求めて集う場所が学校である。断じて20歳前後の若者達だけに独占させる場所ではない。税金によって成り立っている国公立大学は特にそうだ。学びたい者は誰でも入れる場所にすべきである。少子化の進む現在では尚のこと、大学の生き残りをかけて、社会人入学を促進すべきである。

どうでもいいが、わが金沢大学はなんと不便な場所に移転したことか。学生が角間まで足を延ばすには相当に覚悟のいることである。教授も魅力ある講義をしなければ学生は集まらないだろう。楽問(がくもん)を愛する諸君！
noch einmal!

北の都の思い出 (I) 卒業研究

0期 田村 昭夫

去る6月6日の夜、工学部の前で野宿していると、物質化学工学科の上田教授に出会った。早速、私達がお世話になった当時の上田俊三名誉教授に、私が又金沢に戻ってきたことを連絡して下さった。上田先生には卒研で大変お世話になり、奥様にも下宿のことで御心配かけた。

その晩は先生のお宅で泊めてもらうことになった。ビールを飲みながら、先生は京都での学生時代の思い出話をして下さった。

上田先生の卒研は、石橋雅義先生(元金沢大学長)の下で分析化学を修められた。卒研の締切も間近に迫ってようやく有機試薬の合成が出来たと云う。従って実験時間が少なく、データの量が不足して論文の枚数も少なくならざるを得なかった。

それで上田君は一計を案じた。「字を大きくすれば論文の枚数も増える」と。結果は大成功。石橋教授から「君の論文が一番読み易かった。他の学生達のは字が細かく長過ぎて、読む気がしない」とお誉めの言葉をいただいたという。

石橋教授を上田教授に、上田君を田村君に置き換えたら、そのまま私の思い出話になるのである。

北の都の思い出 (II)

工学部食堂委員会

机の引き出しの下から1964年1月に工学部食堂委員会の行った「嗜好調査書」が出てきた。

当時私は食堂委員会の「味見委員」という要職にあって、日夜、学食の改善に腐心していた。味見委員の仕事は厨房に自由に出入りし、飯を只食いして文句をつけることだ。私にとってこれ以上のはまり役はなかった。

当時の食堂には5、6人のおばさんが居た。ある時、カレーライスがどうも酸っぱい妙な味がするので、作り方を聞いてみた。おばさん達が云うには

「学生さん達はカレーライスにソースをかけて食べているから、はじめからソースをいれてカレーを煮込んだ」

とのこと。私はおばさん達に

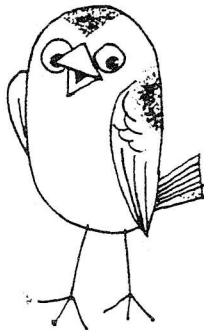
「香林坊のレストランで本物のカレーを試食してきて下さい」

と云って金を渡した。おばさん達は喜んで出掛けていった。

次の日私が厨房に入ってゆくと、おばさん達が皆、私のところへ来てお礼を云う。

「昨日、香林坊の不二家でカレーを食べてから、作り方を教えてもらったがや。今日からうまいがになったじ、食べてまし。」

とのたもうた。



97年度15期会報告

—伊吹山高原キャンプ編—

＜幹事は会報への報告をもって任務終了とする＞と、勝手に決めたのはいいけれど…野外キャンプの準備に奔走した宇野さん夫婦のことを思うと、これ以上のノルマはお気の毒で…。それにこれから原稿を待つと、秋の小屋酒場の連絡がつかなくなるかも…。せめて、語調を変えて、報告致しましょう。

昨秋小諸で、いつものように「素面のうちに」次回幹事を宇野氏に決めて、宴会に突入。その日から彼はある知恵も、ない知恵も絞っていた訳ですが、二世達も親離れを始めた今、このあたりで一丁キャンプでもやらにゃあ、ただのオジンとオバン軍団に成り下がる…が、華の15期に彼が抱いた危機感でありました。かくして「伊吹山高原でキャンプをしよう!」の大本営発表は高らかに打ちならされたのでありました…。

それぞれ事情のある方を除き、大人20名、子供10名の参加が確定。しかし、これもいつものように、というよりいつも以上に夏休みが近づくにつれそれぞれの都合がでてきてキャンセル相次ぎました。仕方がないとは思うものの、多くの方に喜んでいただけるのが幹事のやり甲斐ですからねえ…野外のたいへんさを覚悟で取り組んでいるのだから一層がっくりの一時もあったようですが、スーパーマン宇野氏は気を取りなおし、最後の直前確認に精を出されたのでありました。

8月2日、台風後のぐずぐず天気もようやく一段落。夏らしい日差しがじりじり照りつける米原駅にまず集合。前回から半年。その間には、高村・石田両君の追悼集編集に結構連絡が行き来した事もある、久しぶりという感じがしません。今日のために、6人乗りに買い換えたという車2台を含め、車4台を連れ最後の買い出し。目指す伊吹山は猛暑に霞んでおりました。

ゴンドラ手前の駐車場に車を収め、唯一現地へ直行の舟田さんちのノマドに高張る荷物を乗せ、

あとの団装は手分けしてゴンドラの人に。宇野夫人は先に3合目に上がり、テント確保をして待機しておいでました。

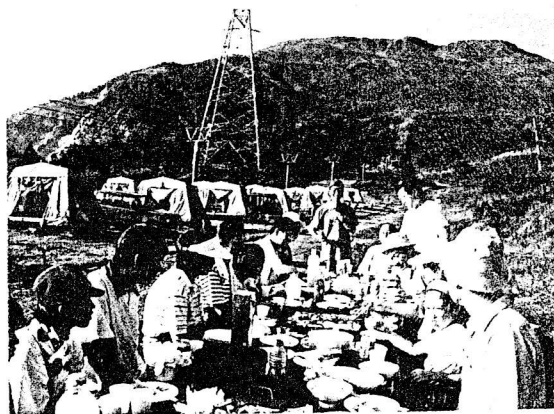
(5年前に彼が来た時の記憶では、3合目までの林道状況が悪く、一般車で通行は無理と判断。ところが…テントサイトへは続々と車が上がってくる時代になっていたのです。先行した夫人はこれを伝えようと夫の携帯電話を何度も呼び出すも…。でもゴンドラはゴンドラで高度感もあって好評だったようです。

今後のために。3合目まで一般車も上がってきます。伊吹高原からも、携帯電話は使えませんでした。)

石川県の山を走り回っている舟田さんちの方は、あっけなくキャンプ場についてしまい、ずらりと並ぶテント群にびっくりしておりました。御前峰を拡大したような斜面をぞろぞろ登っていく人達が、カメラの「あおり」で覗いているような感じで見上げられました。見下ろすかっこうのゴンドラ高原駅からは、15期の善男善女が上がってくる所でした。

まず広げるものを広げて…とタープ設置にかかります。テーブルを広げ、冷やすものはバケツにつけて…。椅子に座ってホッとすると、さすが高原の爽やかな風を感じることができました。宇野さんから、今回の企画の経過や、あとの予定を聞きます。夜行登山をする「物好き」は舟田家御一行様だけのはずでしたが、明日は山岳マラソンがあることや、この暑さでは日中はきついぞで、皆で2時起きにチャレンジしてみることにしました。何しろこうしている間もぞろぞろ登っていくし、ゴンドラは終日運転になっていて、どうもこの山はワングル仕込みの感覚ともずれているようなのです。

と、一組の父子が登場。16期清水重仁さん親子でした。小屋酒場の時お誘いしたのを、都合をつけて来てくれたのです。さらに午前中はまだ診察をしていたという祖父江さんも登場。これで大人14名、子供7名の参加者数となりました。会費支払いの段では、いくつまでが子供か？でもめたよ



うです。その件は、〇〇さんちの子供なら、20歳を過ぎても子供なのだと決まりました。(そんな歳までついてくるか!) そんな子供じみた親をよそに、本物の子供達は虫取りをしたりテントの中でゲームをしたり…。

さて、キャンプならではのバーベキュー。楽しみでもあり、まあテレビも何もないとそれしかすることがない面もあります。こまめな働きぶりを子供にびっくりされているお父さんもいました。3台のバーベキューテーブルを並べ、今はくっきりと晴れ渡った伊吹山をバックに乾杯。ここに集えた人もいくつかの無理や不義理をしなければならなかったと思います。それでもよかったと思える一時…。早々にビールがなくなってしまいました。ロング缶24本にまだそれぞれの持ち込みが何十本かあったのに。そのどれだけかを飲んだ清水さんはしきりと高村さんに訴えていました。BHに掛けてあるあのボロボロの赤布をどうかもらって欲しい…。何より高村夫人が参加すると聞いて彼は是非とも伊吹山へと思ったそうです。揃ってあの赤布(白山-BHPW完全縦走記念)の前でお酒が飲めたら…何度でもあの時のことを楽しめたのにね。そんなことがかえって私達をつないでくれているようにも思えます。そういえば1週間後に横井さんの3回忌もあります。宇野さんと佐野さんが出席してくれるということで、寸志もその場で集めました。

山が輝いて、それから色が沈み始め、星が瞬き出して…それでも、次から次と登山者が…。いつもなら深夜宴会になるのに、今回は「明日は2時起き!」「登らんのは、朝食を用意すること!」で、早々にテントに収まったのでした。

(尚、私めの連れ合いは、バーベキューも口にせず、テントにも泊まらず車中泊。何分「職業病」で、付き合いの悪さはご勘弁下さい。女房の同期会についてくる点は感心してやってね。)

8月3日。「2時だよー」。意外に子供達もさっと起き、「おなかすくよ」で飯盒飯のお握り…昨日よりますます固くなった(誰かの水加減のせいという噂)お握りを素直に食べていました。舟田隊長を先頭に、懐中電灯がポツポツ点滅する伊吹山へゴー。満天の星に、上がる程に広がる夜景が何ともグー。大人達の方は「2時起きだの、1時起きだのってやったねえ。」「3ピッチ目ぐらいでやっと懐電がいらなくなったり」と、山に登って一層思い出にひたっています。子供の口から「気持ちよかった」「山はいいな」が聞きたいものだけれど、子供の方はしっかり親に付き合われていると自覚しているようで…。

5合目には無人小屋が、あとも1合目毎に広場状になっていてピッチもと易い…しかし、しかしガスに包まれ出したのでした。しまいには5m先も真っ白。懐電の光跡が浮かび上がり、髪がびっしょりになり…明けゆく空の感動を味わわせたかった親にはがっかりの天候。まあこれも貴重な体験、かえって訳のわからんうちに登れたかもと、親心はおも悔し紛れの講釈を述べるのでありました。

9合目で2時間経過、子供達の我慢もそろそろ限界か?のあたりで道はすっとなだらかになり、頂上部に達しました。小屋がぼーと浮かび上がり、仮眠の人達が丸太のようにならがり…そんな中、わずかの傾斜を手がかりに草原を進むと大和タケルの像の前に達しました。あと数分でご来光の筈が…。いったいどこがうすら明るくなってくるものか?これも判別できず。



行動食を分け、懐電を納め、防寒着を着込み見渡すと、さすがに日の昇った明るさの中で白露の奥に何重にもなった人垣を認めることができました。反対側の伊吹山ドライブウェイからあがってくる人で、山頂の方がずっと人口が増えるとの宇野さんの説明どおりでした。栄光の登頂者で記念写真。清水家は裕介君が代表。昨日飲み過ぎたお父さんは数m歩いてはオエをやっていて「まだ来ないよう」でした。ええやない。小2息子は立派に自立してるよ。

執念で測候所脇の一等三角点を見つけ、ここでようやく中空に浮かぶ日輪を寸時確認。それ万歳。これで見た見た帰ろう、と下山開始。清水パパとも無事すれちがいました。

さらに数分下りたところで、ずっとガスが切れたし、お花畑が広がり始め、舟田さんちは頂上へ引き返しました。これやっぱりガイドブック執筆の習性。チャンスがある限り確認してこなくては。さっきとは雲泥の差の光景が広がります。これだからガスは怖い。お花畑が朝露にキラキラ光り、その真下には大駐車場が見えます。1377mの標高でありながら(当たり前だけれど高三郎より低い)これほどのお花畑が広がり、雲海も楽しめるなんて。あんな半分割られた山…の評価がガラリと変わりました。主人の方もご機嫌で、「あの花撮ったか」とか「むこうをバックに撮りゃどうや」とか。お花畑コース側へ迂回してから下山路

に戻りました。登りの時は闇とガスで気付かなかったけれど、そこらじゅうの斜面が、ナデシコ、コオニユリ、ソバナ、ホタルブクロ、シモツケソウといった花でいっぱいなのでした。夏は白山と北ア、北上しても南下できるか！には、本当に驚きの山でした。

5合目で本隊と合流し、テントサイトへ。老体組がどれだけ朝食の準備をしているか？お米が研げた所でした。目玉焼きがスクランブルエッグになるなどいくつかの臨機応変をこなして、それぞれ自分の分を確保。正調「ご飯の歌」を高らかに歌い、子供達の冷たい視線を浴びるも、これこそ同期会。

あとはすることなく、睡眠不足を補いつつ、「かっぴ伊吹」の開幕を待ちます。なおも登山者はひっきりなしで、準備はどの程度なされるものなのか懸念するうち、高原ホテル前からの中継車のアナウンスで、第一走者の登場。さすが第一走者、悠然たる走りて駆け抜けていきました。その後、第二、次第に団塊状になり、女性に、老人に、

外国人に…いろんな体型、いろんなファッション…参加者は千人とか…。眼前を行くランナーには疲労の色が濃くなりはじめ、はるか先頭がガスの中へ消えていく頃には、ウォーカー軍がゆらゆら歩いているようになりました。

テレビなら、先頭集団を映すくらい…こんな先頭から終わりまでを眺めていたのは初めてです。トップグループになれる百人くらいはともかく、あとの人はそれぞれの夢で走っているのだろうなと思いました。私はこの後、やまざとの編集や、秋の小屋作業の準備を抱えている身でした。こんな暑い山を駆け登ろうなんて、そんなアホな夢を見ている人達をぞろぞろ見て、なんとも励まされてしまったのでした。

宇野さん有り難う。次回幹事は奥名さん。40周年とからめ、金沢で開催の予定です。



11期 長岡 正利様からは貴重な資料の数々を頂戴しています。そのうちから

「日本の山岳標高一覧」-1003山-

平成3年8月 建設省国土地理院

p.124 からの付属資料抜粋

「科学の発達と世界に関する知識の拡大とともに地図は精確なものになってきた」

ニュートン4月号 p.72から

(大きな絵図は印刷の時くっついてあと
の処置がたいへんなので、割愛させてい
たきました。)

「本邦一等三角測量の歴史とその三角網」

一等三角点研究会会報「聳嶺」第22号p.3 から
の3点を紹介します。

また、近著の地形図目録についてここに紹介し
ておきます。

□ 5万分の1地形図作成 ・ 所蔵目録を刊行

国土地理院は、陸地測量部から国土地理院に至る約110年間にわたり作成し続けてきた5万分の1地形図の総目録を刊行した。これにより5万分の1地形図の作成についての詳細な実態が明らかになった。

この目録は、国土地理院が所蔵している5万分の1地形図に、個人等所蔵のものを加え作成したもので、従来の各種目録では不明であった適用図式や図歴等が地形図1枚ごとに詳細に記載されている。

また、新旧の5万分の1地形図を利用するに際して留意すべき事項についての解説等が細かに述べられているとともに、5万分の1地形図作成史上重要な一覧図が4枚添付されており、地図・地理史料として貴重な目録となっている。なお、目録は(財)日本地図センター(〒153 東京都目黒区青葉台4-9-6 ☎03-3485-5413)で、税込3300円(送料450円)で購入できる。

日本の山岳標高一覧

付属資料より

1. 日本の山岳標高の調査

近年、山に対する関心が高まり、山の標高、山名などについての正しい情報の提供についての要望が高まっている。

国土地理院では、2万5千分1地形図をはじめとする地図の刊行をその業務の一つとしているが、作成する地形図では、特別に山頂の高さを調査し、表示することになっていない。そのため、山の高さとしては

- (イ) 山頂にある三角点の標高値
- (ロ) 山頂に表示された標高点の標高値
- (ハ) 最高位の等高線数値

などが用いられてきた。

しかし、これらの標高値を、山の高さとして採用するにはいろいろと問題がある。すなわち、三角点の場合には山頂(文字どおりの最高点)にあるとは限らない。なぜなら、その位置は三角測量の実施に都合のよい場所が選ばれているからである。また、等高線数値で代用する場合には、山頂はその等高線の表す標高値よりは高いことになる。

さらに、写真測量による2万5千分1地形図の全国整備完了により、それ以前の平板測量中心の5万分1地形図の標高値とは異なる標高値も得られ、同一の山について、いくつもの標高値が存在する場合もあることになり、整理する必要も生じていた。

以上に加えて、山の高さについて、国土地理院の地形図以外の全国的規模の情報もないのが実情のため、地形図利用者から山の標高を正確に知りたいという要望も寄せられるようになった。

このため、日本の主要な山について、その標高・位置などについて点検・補足測量を実施し、表示可能なものについてはその結果を地形図上に表示していくとともに、これらの結果をまとめた技術資料を作成することにした。

2. 調査の経緯と組織

(省略)

3. 検討事項

上記委員甲斐における検討事項のうち、この技術資料の理解のため主要なものを以下にとりまとめる。

(1) 山とは

山とは、地表面が大きく盛り上がったものと考え、眺めた感じで一つの山の範囲を定める。山には一つの頂上に斜面が集まる単純なものもあれば、複数の嶺、複数の頂上を持ち、全体の総称としての山名と部分的な峰や山頂部に別の山名を持つものもある。

(2) 頂上のとらえ方

山の頂上は、山体を構成する岩石圏の最高地点とする。樹木などの生物圏に属するものは、山体の一部とは考えず、また人工的建造物も山体の一部とは見なさない。岩石圏としては、基盤岩石とその風化生成者、火山灰などの天然現象で堆積した未固結物質を含むものとした。

(3) 山と山名の取扱いについて

1つの山の範囲の認定については、以下のような複雑さを避け、従来からの一般的慣用を尊重しつつ表1のとおりとした。

富士山を例にして考えると、その山頂部はお鉢と呼ばれる火口をとりまく9つの峰で構成されているほか、中腹部に宝永山、小御岳、裾野に大室山・長尾山など多数の寄生火山を有するが、最高峰の剣ヶ峰(3776m)の標高をもって富士山とし、全体を富士山という1つの山とする。そのため、標高3192mの北岳を日本第2の高峰としてきた。もし、富士山第2峰の白山岳3756mをもって日本第2の高山とし、以下久須志山、大日岳と全部を独立させて数えれば、北岳は日本第10位の山になってしまう。

一方、北岳は、白根山(あるいは白峰山)と総称される一連の山なみの北のピークである。そしてこのピークがこの山なみの最高峰であるから、日本第2の高山は白根山であるとし、北岳の標高で代表させるようにすれば、現在第4位の(白根)間ノ岳や第15位の農鳥岳はなく、

他の山の順位が繰りあがることになる。これは第3位の奥穂高岳についても同様で、奥穂高岳で総称の穂高岳を代表させれば、第8位涸沢岳、第9位北穂高岳、第11位前穂高岳などが皆消えることになる。さらに奥穂高岳には、「ジャンダルム」や「ろばの耳」という部分的な小ピークにつけられた山名がある。また間の岳には中白根というピークが含まれる。同様に鹿島槍ヶ岳にも北峰と南峰の二つのピークがあるほか、山脚の部分的高まりに天狗ノ鼻や牛の首などの部分的地名もある。

このように、山にはたくさんのピークが集まって全体として一つの山をつくるケース、あるいは一つ一つが立派な山となるピークで、そのピークのそれぞれに部分的な山名もあり、同時にそれらをまとめた全体の山名も存在するというケースもある。

こうした各種のケースについて、1つの山の範囲を統一した基準であきらかにすることは困難である。一つの方法として、隣合う山頂間の距離とその間の谷の深さから、山を区分することを検討したが、それだけでは全国の山を対象とするには不十分であることが判明した。そのため山を遠望したときの直観的印象、地域住民・登山関係者間での慣用などを併せ取り入れて山を区分した。その際には等高線からの平行投影による立体図集「日本名山図譜」(神中、1986)なども利用して考察を加えた。

この技術資料では複数の峰、小山頂を持つ山については、山名を表示するとともに最高峰の山頂を< >付きで示すこととし、他は省略することを原則としたが、省略できない著名な山頂名がある場合には最高峰でない峰でも< >付きで示すこととした。

また山名として表示した山岳を複数まとめる山名や山域名は、所在の欄や備考欄に適宜表示することとした。

(4) 標高について

(省略)

科学の発達と世界に関する知識の拡大とともに、 地図は精確なものになってきた。

長岡正利 国土地理院地図部長

人類の歴史において地図の作製は、文字よりも古いといわれる。文字をもたなかった民族の間でも、生活圏についての認識の必要から、単純な地図がつくられ利用されてきた。グリーンランド先住民が流木に陸地や島の輪郭をきざんだものや、マーシャル諸島の住民がヤシの葉柄に小石や貝殻を固定して島の分布をあらわしたものなどが有名である。

エジプトではバビルスにえがかれた紀元前13世紀の金山の地図が、バビロニアでは紀元前8～前7世紀の粘土板にえがかれたはじめての世界地図が知られている。ギリシアでは早くから地球が球体であるという認識があった。紀元前



紀元前8～前7世紀、バビロニアで粘土板にえがかれたはじめての世界地図、円盤状の陸地を海が取り巻いている。

3～前2世紀のエラトステネスは、エジプトの地で地球の大きさを実測している。

紀元前4世紀のアレクサンドロス大王の東征によって、すでにアジア世界についての地理的知識がもたらされていた。2世紀のプトレマイオスは緯度・経度の概念を導入するとともに、東半球の大半についての世界地図を作製した。この図では南に未知の大陸がえがかれ、インド洋が内海になっているものの、世界はガンジス川の東にまで広がり、ヨーロッパはかなりくわしいものになった。

より精確な世界地図の時代へ

中世ヨーロッパの世界観は聖書の規定するところとなり、科学は衰退して、世界は初期のギリシア人の考えたように平らなものとされ、球体説は退けられた。一方、アラブ世界ではギリシア、ローマの科学が引きつがれて発展した。航海術の発達もあって、12世紀のイドリースーの世界図では中国東岸までがえがかれ、倭（日本）と考えられる「ワークワーク（たんなる「島」の意味とも考えられる）」がはじめて地図に登場した。

その後ヨーロッパでは、十字軍の遠征によって東方世界のすぐれた科学技術がふたたび導入された。15世紀を中心とした大航海・地理的発見の時代には、コロンブスやバスコ・ダ・ガマ、マゼランらによる諸発見もあって、世界に関する地理的な知識は飛躍的に拡大した。

16世紀に入って、メルカトル図法で知られるメルカトルは航海用の各種地図をつくった。彼につづくオルテリウスやブラウは、世界全図やすぐれた地図帳（アトラス）をつくり、17世紀にかけて地図界におけるオランダの全盛時代を築いた。このように世界の地図は科学の発達にともなう、また世界についての知識の拡大とともに精確なものに近づいてきた。

一方、地域的な地形図は、17世紀の三角測量の発明とともに精度を高めていった。とくにフランスでは18世紀後半、カッシーニ一族による国家事業として、国土全域にわたって8万6400分の1地形図が作製された。地形図は長い間、平板測量によってつくられていたが、20世紀になり、空中写真測量によって広域にわたる効率的な作製が可能になった。

日本での地図づくりの歴史

日本では7世紀以降、律令体制の下で田園・荘園図がつくられた。しかしこれらはほとんど現存していない。8世紀の東大寺領墾田図などわずか数点が、正倉院御物の中に残されているにすぎない。日本全図としては、奈良時代の僧・行基によるとされる行基図が有名であるが、現存するものはのちの鎌倉時代の写本である。鎌倉時代には荘園管理のために、多くの地図がつくられた。それらは奈良時代の方眼図法によるものではなく、荘園や村の範囲を鳥瞰的にえがいた見取り図的なものとなった。

16世紀の安土桃山時代には、当時さかんとなった南蛮貿易によって、世界地図や地球儀がもたらされた。17世紀の徳川幕府の成立後、幕府は4回にわたって諸国の大名に国絵図の作製を命じ、それにより日本図がつくられた。これらの地図は民間に公開されたものではないが、江戸時代後期になると民間でも各種の地図がつくられた。長久保赤水の日本全図のほか、地方の絵図、町絵図、名所図、道中国など、さまざまなものが広く一般に利用された。

19世紀初頭には伊能忠敬が子午線長の実測のために、全国の主(しゅ)に海岸沿いに測量を進めた。それまでの地図にくらべて格段に精度の向上した伊能図が1821年(文政4)に完成した。

明治以降の日本での地図の歴史

明治新政府下では、1880年(明治13)、首都防衛のために、まず迅速図によって関東平野全域の2万分の1地形図作製が手がけられた。これが「最初の本格的な地形図作製事業」である。当初は2万分の1で全国をカバーしようとして事業がはじめられた。しかしぼう大な費用と時間が必要だったため、1890年(明治23)には縮尺が5万分の1とあらためられ、1924年(大正13)までに一部離島を除く全国の地形図が完成した。

そのころから昭和初期にかけては、第一次世界大戦後の好況と大衆文化の発達の中で、観光旅行などが大衆のものとなり、地図への需要も高まった。その結果、民間での地図出版もさかんになり、陸地測量部(国土地理院の前身)の地図もさまざまなものが次々と出版された。しかし1931年(昭和6)の満州事変以降、しだいに地図は秘密扱いとなり、1941年(昭和16)以降は、ほとんどの地図が発売禁止となってしまった。

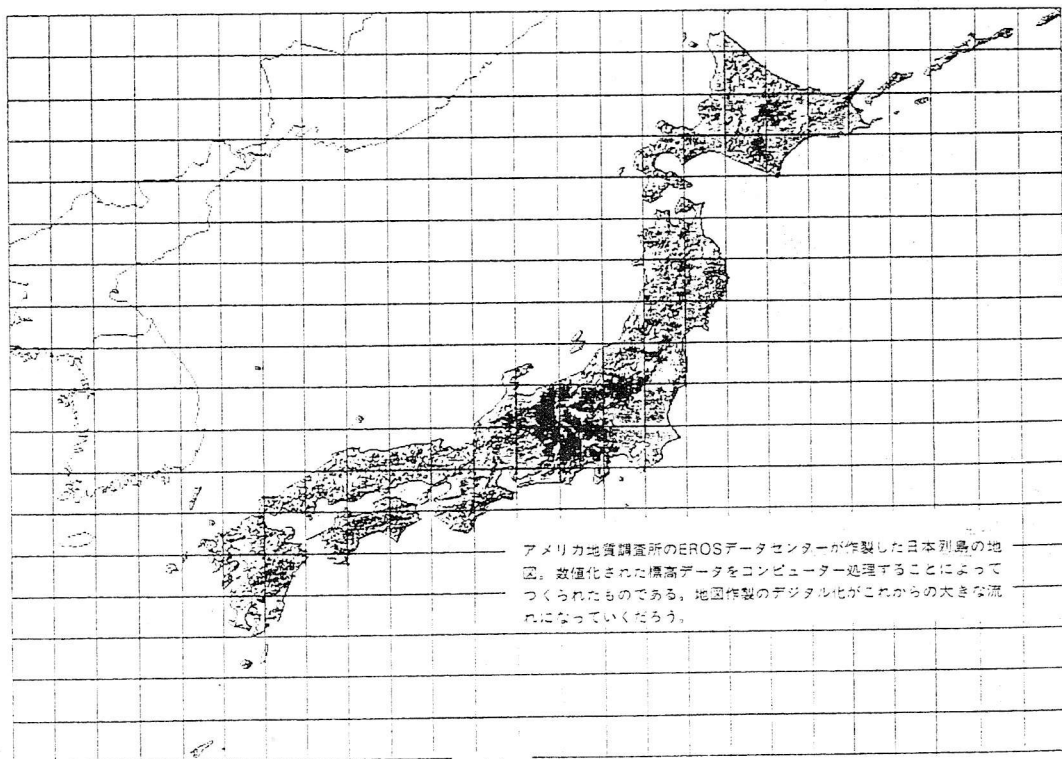
戦後は地図作製の組織として地理調査所(1960年〔昭和35〕に国土地理院と改称)が設置され、アメリカ軍から供与された空中写真を用いて、国土復興用の各種地図がつくられた。1964年(昭和39)には2万5000分の1地形図が全国をカバーする国の基本図として定められ、1984年(昭和59)に全国の整備が終了した。一方、高度経済成長期の前後から、土地利用図や土地条件図など各種の主題図があいついで作製された。

コンピューターや衛星を利用した地図づくり

現在(いま)はまさに地図の全盛時代といえるであろう。技術の推移をみれば、古くは目算測図ともいえる絵図の作製、伊能図では天文観測と導線測量、明治以降は平板測量、戦後になって空中写真測量の本格導入へとつくづく。今日では、少なくとも標高などの地形形状については、コンピューターによる自動認識が常識となっている。広域的に地表をとらえる点では、リモートセンシングによって地表の植生などを把握することのほか、最近では10万分の1程度の地形図であればむりなく作製できるようになっている。

地図づくりにおける位置の基準(緯度・経度)の測定についていえば、肉眼観測による三角測量などにかわって、光波測距から今日ではカーナビゲーションと同じGPS(Global Positioning System)によって簡素化・高精度化が進み、この技術は地震予知などにも利用されている。地図情報の提供についてみると、かつては土地の改変がそうはげしくなかったこともあって、測量から地図の出版まで3年くらいを要するのが普通であった。しかし現在では年1回以上の修正・更新が地図の商品価値として当然のこととされている。

情報提供の方法としては、最近まで紙の地図以外には考えられなかった。現在ではコンピューターでの使用を前提とした数値地図も多くなってきた。カーナビゲーションの地図データを中心に、地図のCD-ROM出版が急速に普及している。またコンピューター・グラフィックスの発達とともに、利用者がみずからの必要に応じた地図データを自由に取りだして、独自の地図づくりを楽しむことも可能になりつつある。



本邦一等三角測量の歴史とその三角網

長岡正利

はじめに

明治新政府の各省は、それぞれ所管事業の推進のために正確な地図作成を必要とし、そのために独自に測量事業に着手した。これらはやがて陸地測量部の事業に統合され、大正4(1915)年には、北海道から沖縄までの、今日に残る一等三角網の完成を見た。

本稿は、本会会長三谷忠男様から、当時の一等三角網図の紹介を依頼されたのを契機として、網図の理解のために、その間の事情をとりまとめたものである。なお、本稿中で、図1と2は湯田沢雪夫様(国土地理院)所蔵の文献2から、図3と4は大森茂様(もと関東軍測量隊副官)旧蔵の文献5から転載した。また、箱岩英一様(国土地理院)には、文献の所在等について種々ご教示を戴いた。

明治前期の三角測量

1) 工部省測量司

わが国最初の三角測量は、工部省(工業・鉱山・鉄道・電信等を所掌; 明治3年設置・18年廃止)により着手された。同省に明治4(1871)年に設置された測量司が、翌年から東京の地図作成のため、英国人マックウエルの指導のもとで東京府下13箇所に三角点を設置し、高測標を建てて測量を始めた。

しかし、この組織と事業は、明治7年に内務省(警察・土木・地方行政等を所掌; 明治6年設置・昭和22年に解体・廃止)地理寮(10年に地理局と改称)に移管された。

2) 内務省地理寮・地理局

地理寮は全国測量の精度確保のために、前述のマックウエルを測量師長として、明治8(1875)年5月に関八州大三角測量事業を開始した。11年には那須野原でわが国初の基線測量を実施するとともに、電信法による経度測定を行った。

内務省の事業においては、明治15(1884)年頃には一等三角点の選定約100点、うち約50点の観測を終え、16年には静岡県三方原でも基線測量を行った。

なお、これらの事業は、明治17年6月には陸軍省参謀本部(明治8年設置の天皇直隸の陸軍総帥機関で、4年の兵部省参謀局に始まる; 9月に測量局新設)に移管された。文献8によれば、現在の一等三角点のうち、関東・中部地方のものは大部分、地理局のものがそのまま引継がれたものである。

3) 北海道開拓使

開拓使(北海道の行政・開拓を所掌; 明治2年設置・15年廃止、後の北海道庁)は、明治8(1875)年より、北海道全域について三角測量事業を開始した。天文測量による原点を函館に置き、勇払原野に15kmの基線と函館に補助基線、三角点を約50点設けた。

4) 陸軍省参謀局

陸軍の測量機関とその事業は、明治4(1871)年兵部省参謀局に間諜隊を置き、地理の偵察、地図の編成を掌ったことに始まる。7年には参謀局に第五課(地図・政誌担当)と第六課(測量担当)が新設された。8年に参謀局が参謀本部となって以降、9年には今日に残る東京五千分一測図に着手(翌年の西南ノ役で中断し、17年終了)、12年に第五課は地図課と改称され、13年に

全国測量の第一歩として、関東平野全域についての三角測量によらない二万分一迅速測図に着手した（19年測図終了）など、その初期には地形測図（地図作成）が主となっていた。

測地測量については、明治14年には、測量課（12年に第六課を改称）が東京湾口の三角測量を試験的に実施していたが、本格的な三角測量事業は、8年間にわたってドイツに留学していた田坂虎之助が明治15年に帰朝し、小菅智淵（後の初代陸地測量部長、全国測量計画の企画・推進者）の下で参謀本部測量課長に任ぜられて以降である。同年、測量課は大地測量班と小地測量班に区分（翌年には部）された。当時、「内務省ノ大三角測量ハ當時ニ於テ外業ノ進程甚タ大ナルモノアリト雖モ其ノ成果ハ未タ全ク精算ノ域ニ達セス随ツテ之カ利用ニ便ナラサルヲ以テ特ニ二等三角網ニ對スル基線ヲ測定シ以ツテ急速ニ地形測圖ヲ施行スルノ素地ヲ作ラントス」（文献4より原文のまま）として、9月に神奈川県相模野に初の基線を設置した。当時は、ヒルガート4m基線尺を用いて、5.21kmの基線測量に106日を要し、確率誤差は±2.93mmであった。翌明治16（1883）年には、武遠三角網について、陸軍として最初の一等三角測量（観測）に着手し、あわせて同年、一等水準測量も開始している。

なお、基線については、明治44年までに北海道から沖縄までの14箇所に、ついで大正2（1913）年に択捉島1箇所、大正15年までに樺太と台湾に5箇所設置された。このほか、朝鮮には13箇所、満洲には一等基線20箇所、二等基線約140箇所が設けられた。基線長の測定は、14番目の沖縄からはエーデルン25m線條基線尺が正式に採用され、精度が向上（基線長4.15kmに對し±0.41mm）するとともに作業能力が向上した。

明治17（1884）年6月に、参謀本部に三角測量事業が移管・統合されたことは既に述べた。この年9月、参謀本部に測量局が新設され、従来の地図課はそのまま、大地測量部は三角測量課、小地測量課は地形測量課の、3課体制とされた。同年、麻布の観象台に経緯度原点を定め、三角測量の計算原子を決定するとともに、筑波山一等三角点を原方位に採用し、原方位角の測量を完了した。

陸地測量部の三角測量

明治21（1888）年5月、「陸地測量部條例」が公布され、それまで参謀本部の一部局であった測量局は、参謀本部長直轄の独立官衙となり、三角・地形・製図の3科と修技所（職員の養成機関、20年に設置）を置いた。当時既に、武遠・三丹・摂讃紀伊・丹伯の三角網の観測が進行していた。22年には修技所の第1期生徒35名が卒業し、以後、陸地測量部の技術者は逐次充実されて行った。23年には、測量標の保護等を目的とする「陸地測量標條例」・「同 施行細則」が公布された。翌年、紀伊串本ほか5験潮場が開場し、5月には三宅坂の陸地測量部前庭に水準原点が落成した。

三角測量の進捗状況は表1および2のとおりであるが、主なところでは、明治29（1896）年には北海道に進出（奥石網）、31年に武遠三角網の集成計算を終えて初めての実用成果を算出、大正元（1912）年に沖縄（隅沖網）、4年に千島（千島網）の観測に着手、39年には三角網を離れて樺太での日露国境画定作業の開始などが挙げられる。

ところで、一等三角測量の実施のために必要な作業規程については、明治33年に「三角測量法式草案」が作成されているが、「一等三角測量実行法」がその附図や観測手簿等の記載例とともに完成した（文献1,2,3）のは、内地の事業完了後の大正6（1917）年である。しかし、その測量方式はこの制定以前におけると大差はない。また、電磁波測距儀の発明とその後の光波（レーザー）測距儀の発達によって、昭和50年代には、角観測から辺長測量が主体となるまで、

戦後も長くこの「実行法」のもとで測量が進められた。

一等三角点標石とその埋設法

「実行法」によれば、一等三角点標石の規格は図1のように、通常は、柱石、盤石、下方盤石の3点（下方盤石は明治33年以降）からなり、石材は花崗岩とされて、明治29年以降は小豆島産のものが用いられた。なお、明治29年以前については、標石は測量官が任意に調達していたので、その石種と形状はまちまちであった。

三角点の設置については、当然のことながら、それぞれの十字溝の交点を三角点の中心（ものとしての三角点ではなく、位置成果をいう）に一致させるとともに、標石3点それぞれについて各辺を東西南北に一致させ、柱石の正面を南方に向けるべきことが規定されている。図1に示された規格以外に、柱石の地上露出相当部分は「小敵仕揚ケ」、ほかは総て「荒鑿落シ」とし、前面に刻む5文字の深さは太さと等しくして円底彫とし、両盤石は上面のみ「小敵仕揚ケ」としてほかは総て「荒鑿落シ」とする等のことが規定されている。柱石の地上露出部分は、現地をよく目にするとおりだが、盤石については、関東地方では谷川岳山頂のものが相当以前より露出しており、容易に実見することができる。

その埋定（埋設）法は図2のとおりであり、現地の地盤条件に応じて変え得るとされている。図の上が通常の場合で、深さ1.3m、方1.2mの穴を掘開して埋設する。実行法にはその詳細が述べられているが、ここでは略す。なお、標石の周囲には、通常4個の防衝石が設置されるが、高山頂等で必要のないときは略される。岩石地で鑿開困難の場合は、図の右上のように、適宜に埋設法を簡易化し、さらに岩盤が堅硬な場合は、坑底を水平に削ってその中央に十字形を刻み盤石に代用することも可としている。砂地や湿地の場合（図の下）には、松、栗、椎などの腐植に耐える木杭を列植して基礎を固め、その上に煉瓦で筐形を造り、その中に埋設することとされている。

一等三角網の完成とその後

一等三角点の観測は、大正4（1915）年には沖縄島から択捉島までを終え、内地の一等三角網は完成を見た。これと並行して、地形図作成のために、二等、三等の三角測量が進められた（表1）。一等三角点本点は、1,600km²に1点設置され、その平均辺長は45km（40～60km）、観測誤差は1.5秒、三角形の誤差は1秒（45kmに対して22cmに相当）である。設置された一等三角点の位置の精度は、三角網を構成する各三角形の閉合差における1角の中等誤差が、結果として0.66秒（全三角網の平均）となったことから、本点の平均辺長45kmを乗ずれば14cmとなる。

一等三角測量は、さらに台湾（1914～21年）、樺太（1921～32年）へとその作業を進めて行った。図3と4は、昭和2（1927）年におけるその成果を総覧して、陸地測量部長大村 斎陸軍少将が、日本学術協会第3回大会において、特に基線測量の精度等を中心として講演した際のものである。

なお、これ以外の、千島列島、宮古八重山諸島、伊豆七島、小笠原諸島、尖閣列島、南北大東島、男女群島などの、離島の三角測量については、文献8に詳しい。

最初の全国一等三角測量は、前述のように、明治16（1883）年から大正4（1915）年にわたる32年間で完成した。昭和22（1947）年には最初の改測に着手され、昭和42（1967）年に作業を終えた。その成果は、大地震の復旧測量等の変動量の大きい地域についてのみ改訂が行われ、ほかは実用上の支障はないとして旧成果（明治成果と称する）を実用成果として、次に述べる一次基準点測量終了後も、今日に至るもそのままに使われている。

翌43年より、2回目の改測に着手された。しかし、その頃から、地震予知等のために基準点測量の充実が必要視され、48年以降は、従来の一等三角点、同補点、二等三角点の計約6,000点を「一次基準点」として再編成し、地震予知のための「観測強化地域」・「特定観測地域」については点の密度を高めて、全国の繰返し測量を行い、地殻の詳細な水平変動の把握に努めることとなった。この頃以降、測量方法は、従来の経緯儀による角観測ではなく、精度100万分の1(10kmに対して1cm)のレーザー測距儀による直接辺長測定にとって代られた。最初の一次基準点測量は、昭和60(1985)年に終了した。この結果を、明治期の測量成果と比較することによって、100年間の日本列島の地殻水平歪のようすが明らかとなった。

一方、基線測量については、最後に実施されたのが、昭和19(1944)年の南海地震後の復旧測量のための、28年の鳥取県天神野基線、29年の滋賀県饗場野基線におけるものである。当時まで、基線測量にはなお数十日の期間を要していた。

ところで、三角測量の方法が角観測から辺長測量に代ったことは既に述べた。これによって長期間山頂に留まって行う測量は大幅に簡素化され、今日ではGPS(汎地球測位システム;衛星からの電波による3次元測位システム)測量により、さらに負担の少ないものとなっている。GPS測量では、精密軌道情報を用いることにより0.1ppm(10kmに対して1mm)の精度を得ることができる(ただし、カーナビゲーションのように機器を単独で用いる方法では30m程度の誤差)ことから、地震予知の分野におけるような高精度を要する測量にも使われている。なお、電波星からの電波の到達時間差の精密測定によるVLBIでは、数1,000kmの距離に対しても1cm以下の誤差での測定が実用化されており、プレート運動の実測等に使われている。

GPSによる基準点測量に関しては、平成7年度内に、全国に700箇所以上のGPS連続観測局(電子基準点と称す)が設置され、そのデータは通信回線によって常時国土地理院に送られ、解析されることになる予定である。既に、「観測強化地域」の東海・南関東地方には、地震予知観測のために電子基準点が約15km間隔の高密度で配置され、他の手段と併せて常時連続観測が行われている。

なお、これまでの一次基準点測量は、6年度以降は、GPS連続観測網を骨格として、一・二等三角点のうち、約15km網で編成した点についてGPS測量を周期的に行う「精密測地網高度基準点測量」に再構成されている。

かつて明治期には、三角点間の良好な観測条件を得るために、最長70日間も山頂に留まった例や、目標地点の三角点槽でただ1人太陽光を反射させる廻照器を護りつつ、時々刻々移動する太陽光を数10km離れた観測地点に送り続けた名人芸的熟練さのこと、或いは遠方の山から光信号が来ないので行ってみたところ、測夫は槽から落ちて死亡していたこと(文献6)など、いまや伝説に近くなっている。これに対して、現代の電子基準点による測定については、本年10月の伊豆半島東方沖での群発地震発生の際に、地下へのマグマ貫入によると考えられる数cmの地殻変動(この場合は、初島・小室山間の伸長)が進行する状況をリアルタイムで捉えた例などもある。このように、かつては野外での大変な労苦と時間を要した高精度測量について、今日では室内での連続観測も可能となっており、まさに隔世の感がある。

参 考 文 献

- 1) 陸地測量部(1917;大6):『一等三角測量實行法 上』・『同 下』、95p.・100p.+附表.
- 2) ——— 『一等三角測量實行法附図』、25p.(61図).
- 3) ——— 『一等三角測量實行法記載例(外業)一』、32+82p..
- 4) 陸地測量部(1921;大10):『陸地測量部沿革誌』、319p.+附図・附表24.

- 5) 陸地測量部 (1927; 昭2) : 『本邦測量作業ニ於ケル基線測量ノ總覽』、5 p. + 附図・写真 5.
- 6) 寺田寅彦 (1938; 昭13) : 地圖を眺めて、『天災と國防』所収、105-131. 岩波書店.
- 7) 藤井陽一郎 (1964; 昭39) : 内務省地理局の三角測量事業、科学史研究、1964、72-83.
- 8) 測量・地図百年史編集委員会編 (1970; 昭45) : 『測量・地図百年史』、673p. + 地形図図式集、建設省国土地理院.
- 9) 長岡正利 (1991; 平3) : 明治前期の手書彩色関東実測図 第一軍官地方二万分一迅速測図 原図解題、国土地理院時報、No. 74、22-32.
- 10) 箱岩英一 (1991; 平3) : 日本水準原点創設100周年、測量、1991.5、21-35.

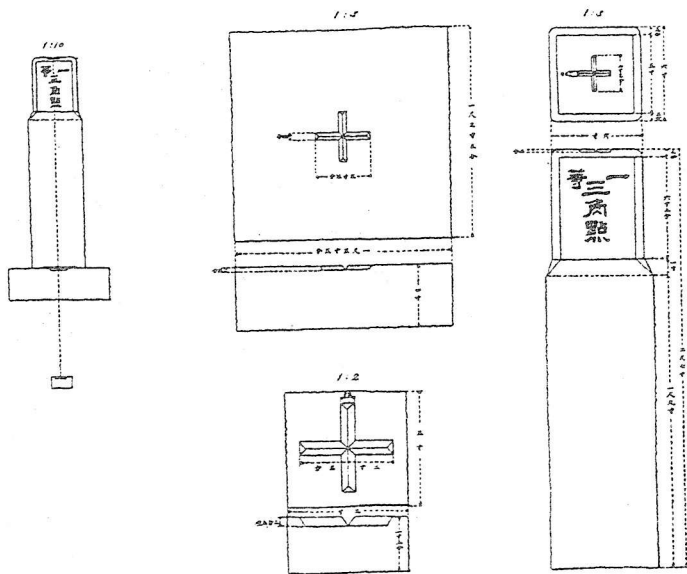


図1. 一等三角点標石の規格 (文献2より; 原図×0.4)

右より、柱石、盤石、下方盤石、設置の際の位置関係

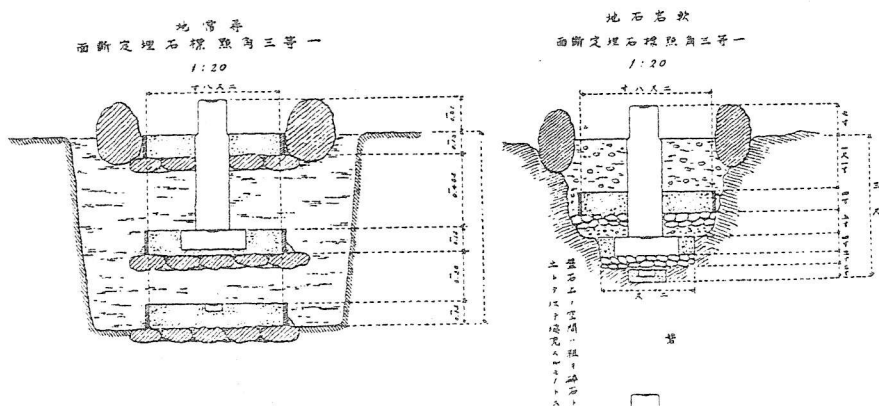


図2. 一等三角点標石の埋設法

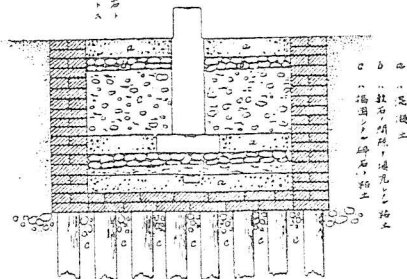
(文献2より; 原図×0.5)

上 : 通常の土地の場合

右上 : 岩石地 (軟岩) の場合

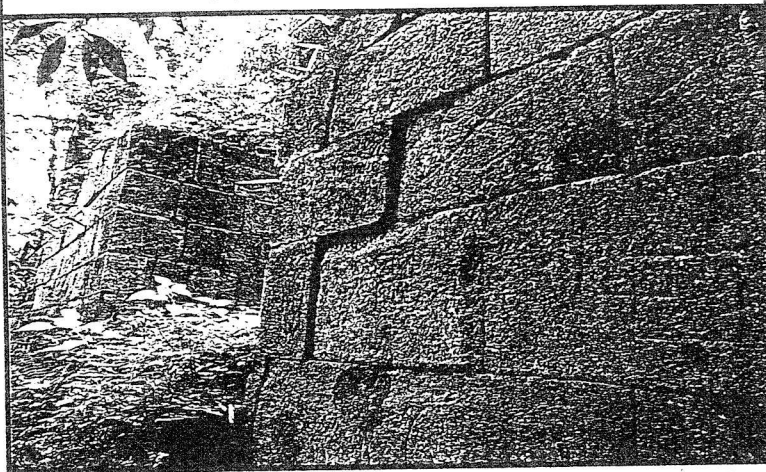
右 : 砂地や湿地の場合

図中で、白部が標石を示し、砂点部はコンクリート (混泥土)。他は本文参照。



金沢城址整備計画

～石川県のマスタープラン～



石川県は平成8年3月に金沢城跡を国から112億円で取得、一帯を都市公園として利用する都市計画を決定した。金沢城跡と周辺の外濠公園を合わせた28.5%を「金沢城址公園」とし、おおむね10年間を目途として整備を進める方針である。このうちすでに敦策略整備が進展しており、石川門から本丸園地、三十間長屋を抜け宮守坂を結ぶメインルート約600㍍と、同園地周辺を巡るサブルート500㍍が去る4月下旬に開放されており、県民や観光客らがそぞろ歩きを楽しんでいる。金沢城は県民の手に戻り、城内はいきいきと輝きだした。

六つのゾーンに分けて整備

「Aゾーン」一本丸跡、東の丸跡、
鶴丸跡の一部「緑と歴史文化財保全
ゾーン」都心部の貴重な自然と歴史
環境広場を整備する。●旧逓送旅籠司
令部庁舎は修復し、教養施設などとし
て活用を検討する。※一の丸御殿の復
元工事の一環として本丸を元の規模に
復元し、本丸跡に本丸御殿を復元す

●豊かな自然と三十間長屋などの史跡が探訪できる散策コースを中心に整備

●★主な整備内容 ●二の丸広場（遺構広場・園地修景・休憩コーナー）

●本丸跡の樹
 施設などの整備を行う。●本丸跡の樹
 内、内政策略の整備は既存ルートを活用
 を行うとともに、乾櫓跡周辺では展望
 殿外構庭園部復元 明治時代建、復
 「Cゾーン」(三の丸跡、鐔ノ跡
 玉泉院跡の一部)「エントランスゾ

し、散策路周辺や石垣部周辺の下刈りは必要最低限の整備にとどめ、貴重な自然と歴史文化財を保全する。★主な部として整備。●石川門と一体となったエントランス広場として、史実を尊

整備内容：★本丸園地（龍策路：三十間長屋周辺修景・展望休憩コーナーなど整備、鶴丸倉庫（搬送路・石垣など修景）の丸庭園（牧路）敷地各周レ・総合案内コーナーなど整備、内

【Bゾーン】
(二の丸)
堀・土塀など(復元) 圖 鶴丸広場(修景)
広場、トイレなど整備および土塀、門

跡)「セントラルゾーン」●二の丸御殿遺構の保存、活用に重点をおいた歴史学習空間の整備 ●三の丸御殿の遺跡、御宮跡)「自由活動ゾーン」

●新丸跡はイベントなどとして整備
●広い利用や多様なレクリエーション

右衛門丸跡は、管理ヤードとして修
整の場として整備する。●御匠跡

※学術文化的な施設など
整備する。

●御匠跡

地にふさい(體
い)一(體
に決まっ

憩コーナー、トイレなど整備。土
 元）■藤石衛門丸広場、お宮広場
 景広場整備など）

整備に当たった県の指針は「都心に残された貴重な緑を保全しながら、江戸後期の城郭の地割りを基に、史実を尊重して整備する」（県公園緑地課）こと。ひとことでは言え「本物志向」の整備である。

具体的には、図のように全体を六つのゾーンに分け、それぞれのゾーンの歴史的特性を尊重しながら整備を進める。

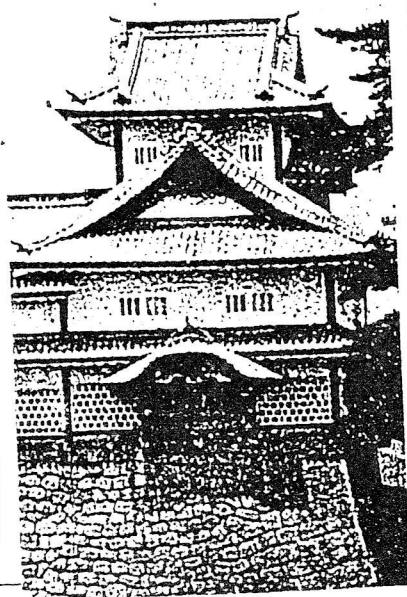
今後の計画で「二里塚」となるのが、十年間の整備計画期間の折り返し点となる平成十三年だ。この年の秋、金沢城址公園を主会場に「全国都市緑化いわけふエ」(仮称)が開催される。同フェア開催に照準を合わせ、いくつかの計画が温められている。

それは、①現在の県兼六園テニスコートを移転させ、水をたたえた庭園水堀を復元させる②二の丸跡に菱櫓

平成十三年は、二十一世紀初頭の年、二〇〇一年である。かねてから二〇〇一年のフェア開催地にふさわしいのは京都が金沢くらい（露わが関筋）と期待されて金沢に決まっただけに、整備計画にも力がこもる。「文化立県、石川」はその歴史遺産に一層の磨きをかけ、二十一世紀の夜明けを飾る手はすである。



「Eゾーン」(玉泉院丸跡)「庭園ゾーン」玉泉院丸園地の整備●金沢城の内庭である玉泉院丸庭園遺構の復元を念頭において園地整備する。★主な整備内容●玉泉院丸園地(修景園地など整備)
「Fゾーン」(宮守堀)「外周ゾーン」金沢城址の外周部にふさわしい整備●宮守堀の遺構調査をふまえて復元する。★主な整備内容●宮守堀修景園地(宮守堀復元、修景園地など整備)



二の丸守った美しい菱櫓

県が復元を検討する菱櫓は、城内のほぼ中央、二の丸の東北にあった二層三階建ての建物。二の丸の正門である橋爪門から続く五十間長屋の先の一角にあった。石川門と同様に白壁やなまこ塀が内堀の水面に映え、風情も格別だったが、明治十四年の火災で焼失した。

菱櫓の絵図が県立歴史博物館にあるほか、古文書も金沢市玉川図書館に保存されている。復元への史料には比較的新しいものがあるが、焼失から一世帯以上を経ての復元に、関係者から大きな期待が寄せられていた。

笹田 竜之 文

金沢市暁町18-21 上田アパート201号

232-8081

愛知県稲沢市小沢3-14-3

0587-32-0268

志賀 寛人 工

金沢市石引2-9-17 小立野台ハイム3-B

232-9728

奈良県高畑市 835

0742-23-0120

角谷 誠 工

金沢市鈴見町7街区9番地 館クセス

262-5879

愛知県西尾市上町泡原37-6

津田 俊平 教育

金沢市東兼六町11-21茨木ハイツ202

222-8120

愛知県名古屋市区金城4-5-9

052-914-1722

矢内 祐一 工

金沢市石引2-27-3 桂荘202

222-8908

岡山県苫田郡鏡野町竹田193

0868-54-2433

主将の挨拶と部の近況

40期 山崎 茂雄



「なんで山に登るの？」

と人に聞かれると、すごい困ってしまう。はっきり言って返す言葉がない。

確かにこの二年間で山を身近に感じられるようになり、何も知らなかった入部当時に比べれば、多少なりとも山に対する知識は蓄えられた気がするし、山の良さも分かるようになった気がする。でも、それを人に伝えたり、教えたりすることがなかなかできない。それは、自分の中にどこか山を嫌っている部分を持ち合わせているからかも知れない。

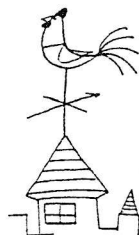
そんな人間がこの部の主将を務めることなど荷が重過ぎ、本来あるべき主将の姿とのギャップにもがきながら過ごしている毎日である。これから先、自分がどれほど山に登るかは分からないが、その中で少しでも自分にプラスになる

ものを見つけ、この部の経験を生かせたら、いつか山の素晴らしさを表現できる人間になれる気がする。そして、そうなった時初めて、この部の主将の重さを感じ取れるのではないだろうか。

さて、部の近況ですが、新入生は10名入り、例年どおりの数となった。新入生トレーニング山行は、昨年の医王山から高三郎に戻し、5月31日から6月2日にかけて行った。天候に恵まれ頂上まで行ったものの、前高三郎から高三郎までの道はなかなか厳しかった。また、虫の多さには閉口した。

現在の活動状況としては、夏合宿に向け、学校の回りを走ったり、サッカーをしったりしての体力維持・向上に努めている。

- * 冬合宿偵察 荒島岳 12/7~8
L 西田 SL 小泉 小西 岩倉 川本 阪本 後藤 上田
- * 冬合宿 荒島岳 12/25~28
CL 西田 CSL 小泉
- * 医王山雪上訓練山行 2/23~24
L 佐川 SL 金吉 三浦 市山 竹内 得田
- * 犀奥PW 2/28~3/6
L 佐川 SL 山本 三浦 上田 小川
- * 春合宿偵察 唐松岳 3/10~11
L 小西 SL 岩倉 川本 阪本 西田 上田 金吉
- * 春合宿 唐松岳 3/17~20
CL 小西 CSL 岩倉 (4年1名 3年4名 2年3名 1年5名)
- * 1. 2年山行
 - < 京都 3/10~12 >
L 村井 SL 小川 前川 森田 長谷川
 - < 高尾山・吉次山 3/29~30 >
L 中野 SL 上田 山崎 田村 谷本 得田 竹内
 - < 武奈ヶ嶽 >
L 高岩 SL 掛布 加藤 林 市山 佐藤 河村

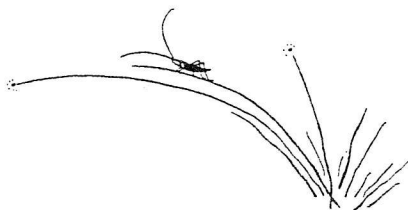


97年度

- * 雪上訓練 白山 5/3~5
L 上田 SL 金吉 佐川 小川 市山 佐藤 竹内 河村 森田
- * 新トレ偵察 高三郎 5/10~11
L 前川 SL 小川 (3年6名 2年9名)
- * 新トレ 高三郎 5/31~6/2
CL 前川 CSL 小川 (4年3名 3年7名 2年9名 1年11名)
- 夏合宿
- * ハヶ岳パーティー 6泊7日 8月上旬
L 小川 SL 高岩 市山 佐藤 青木 矢内
 - 蓼科山ー大岳ー横岳ー東天狗岳ー西天狗岳ー根石岳ー硫黄岳
 - ー赤岳ー編笠山ー観音平
- ・ 第一回トレーニング山行 大日山 6/28~29
L 小川 SL 高岩 佐藤 青木 矢内 傍島
- ・ 第二回トレーニング山行 白山 7/4~6
L 佐藤 SL 小川 高岩 青木 矢内
(交通事故により中止)
- * 北アルプスパーティー 7泊8日 8/2~10
L 上田 SL 村井 林 竹内 川俣 志賀
 - 立山室堂ー雷鳥平ー雄山ー五色ヶ原ー越中沢岳ー薬師岳ー祖父岳
 - ー三俣蓮華岳ー双六岳ー槍ヶ岳ー新穂高温泉
- ・ 第一回トレーニング山行 白山 7/5~6
L 林 SL 上田 村井 竹内 川俣 志賀
- * 南アルプス北上パーティー 8泊9日 8/1~9
L 中野 SL 山崎 田村 河村 谷本 笹田 津田 久保寺
 - 塩川小屋ー三伏峠ー塩見岳ー北荒川岳ー農鳥岳ー間ノ岳ー北岳
 - ー仙丈ー北沢峠ー甲斐駒ヶ岳
- ・ 第一回トレーニング山行 口三方岳 6/21~22
L 山崎 SL 中野 上田 田村 河村 谷本 長谷川 竹内 笹田 津田 久保寺
- ・ 第二回トレーニング山行 白山 7/5~6
L 田村 SL 中野 山崎 河村 谷本 笹田 津田 久保寺
- * 南アルプス南下パーティー 8泊9日 8/3~11
L 掛布 SL 前川 長谷川 森田 得田 角谷 岩崎

北沢峠＝甲斐駒ヶ岳－仙丈－北岳－間ノ岳＝農鳥岳－北荒川岳
－塩見岳－三伏峠－塩川小屋

- ・ 第一回トレーニング山行 口三方岳 6/28~29
 し 前川 SL掛布 森田 得田 林 角谷 岩崎 石川 川俣 志賀
- ・ 第二回トレーニング山行 白山 7/19~20
 し 得田 SL前川 長谷川 佐藤 野沢 石川 矢内



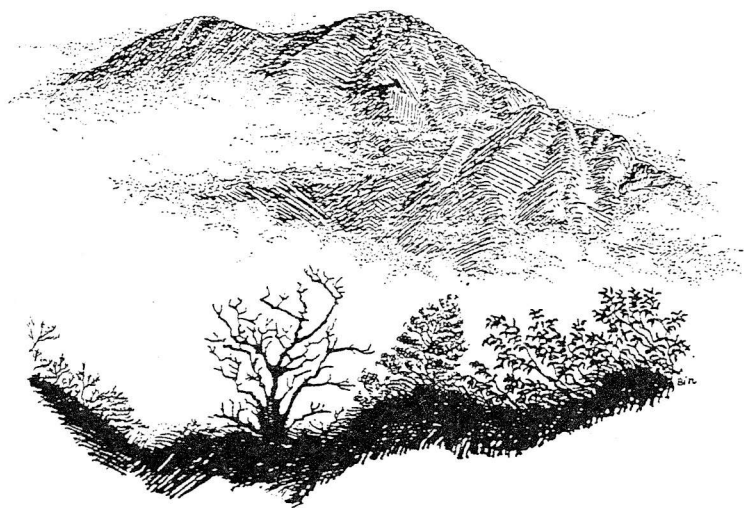
編集後記

ノロノロ台風の御蔭で（被災された方々へは心よりお見舞い申し上げます）夏山は散々。控えにおいておいた雨飾山の往復でお茶を濁すことになりました。同行者達は思わぬ温泉泊まりに「こんな山行きの方が滑休みになるわ」と満足そう。

その小谷温泉山田旅館で、深田久弥のビデオを見せてもらうことができました。雨飾山に同行した友人医師が、当時の1年分の給料をはたいて買ったカラー8mmで映したものをビデオに編集しなおしプレゼントしてくれたもの。おそらく久弥の山のカラービデオはこれだけだろうといういわくつきでした。

にじんだような色ながら、当時の8mmはどんなに重かったものか…。画面に妙齢の婦人が映っています。道のない山へ同行するような方は、日本山岳会の某といったあたりなのかと思ったら、奥様でした。頂上の石仏の前で揃ってお弁当を広げている姿は今を時めく中高年登山者夫婦そのもののほほえましさ…。

百名山の雨飾山の項には、恋こがれてやっと3度目に登頂できたとは書いてあるけれど、夫人同伴で楽しんだことなど一言も書かれてはいません。当たり前過ぎることだったのか、文学に家庭の匂いは入れたくなかったのか…「私たち」の表現に今はかすかにShyを感じつつ、読み直しています。



OB会報「やまざと」

97夏号
(7号)

発行日 平成9年8月

発行者 大島 良治

金沢大学フンダーフォーゲル部OB会

編集責任者 舟田 節子

事務局 金沢市橋場町10-49

印刷 中川 晃成

☎076-222-9288